60-851
1200501272167

背

304
1

醫學博士 小酒井不木著

慢性病治療術

日本心靈學會刊

昭和二年 帝國圖書館藏

2年 6月 7日

調査濟

60-851

序

慢性病治療術と申しましても、他人の慢性病を治療する術を説いたものではなくて、主として、慢性病者が如何に自分の病氣に處して行くべきかを説いたのであります。なほ慢性病の一々について、之れに處して行く道を説いたのではなく、たゞ一般的なことを説いたのに過ぎませぬから、慢性病者は私の説くところを參考として、自分自身に自分の慢性病を治療する工夫をこらしてほしいと思ふのであります。

昭和二年二月

小酒井不木

目次

第一章　序言……一
第二章　現代の醫學は何を爲しつゝあるか……五六
一、醫學的智識の成り立ち……五六
二、醫學と醫術……八四
三、精神と肉體との關係……一一三
四、疾病恐怖心……一三一
第三章　慢性病とは何ぞ……一四六
一、慢性病の意義……一四六
二、慢性病者の心……一六五

目次

第四章　各種の慢性病……一九〇
一、神經衰弱……一九〇
二、ヒステリー……二〇七
三、慢性胃腸病……二一九
四、肺結核……二三一
五、其他の慢性病……二四五
第五章　現今の慢性病治療……二五五
第六章　各種の精神療法……二六二
第七章　合理的慢性病治療法……二〇五
第八章　闘病術……三二六
第九章　結言……三四五

慢性病治療術

醫學博士　小酒井不木

第一章　序言

はじめに讀者の皆さんに御こゝわりして置かねばならぬこゝは、私が醫學を修めたものでありながら、診療に從事して居ないこゝであります。換言すれば、開業して患者の脈を診る商賣を營んでは居ないこゝであります。從つて私に疾病の治療を談ずる資格は毛頭ないのであります。昔から、醫者と南瓜は何とやらと申すゝほり、長い間の經驗を積まなければ、到底よい

醫者となることが出來ぬといふことは、誰でも知つて居ることであります、皆さんは、病氣にかゝつたとき、若い御醫者様にかゝるよりも、年とつた醫者に好んで御かゝりになりませう。これは、醫術には、經驗が何よりも大切であるといふことの立派な證據であります。ですから、醫術に少しも經驗のない私が慢性病の治療に就て語るといふことは、隨分亂暴な企であるといはねばなりません。

けれども私は、その亂暴な企を敢てしようと決心しました。といふと、皆さんは、亂暴な企だとわかつたなら、遠慮してはどうかと仰しやるかも知れません。一應それはまことに尤もなことであります。が、私はその實、私のこの企てを、自分自身では少しも亂暴だとは思つて居ないのであります。といふのは私は醫者として、慢性病の治療について語るのではなく、一個の人間として慢性病の治療について語らうと思ふからであります。

假に、私が、今、一國の政治に就てある意見を述べたとします。その時皆さんは、私が政治家でないからといふ理由のもとに、それを亂暴な企であると思ひになるでせうか。もちろん、私が政治に就て意見を述べましたならば、定めし幼稚な意見を吐くことでせうが、意見の内容は兎に角として、意見を述べるといふことには、さほどの御立腹もなからうと思ひます。一國の國民として、その國の政治を批評するといふことは、ちつとも恥かしいことではないと思ひます。

それと同じやうに、私が、人間として、人間を苦しめつゝある慢性病の治療といふことに私自身の意見を述べることは、ちつとも恥かしいことではないと思ひます。恥かしいと思はぬどころか、慢性病の治療に就て、人間として

意見を述べることは、人間としての義務であることさへ思ひます。若し私の述べることが多少なりとも慢性病者の役に立つて、それ等の人を、苦患から免がれしむることが出來たならば、この上もない愉快なことではありませんか。

もとより、私の述べることが果して正しいかどうかは自分で斷言することが出來ません。若し私の意見が誤つて居たならば、或は世の中に害を與へるかも知れません。然し、自分で正しいと信じたことならば、他人の眼から見て誤であらうとも、これを公にしてちつとも差支ないと思ひます。

さきに私は、「鬪病術」なる一書を著して、肺病療養に關する私の意見を公に致しました。すると、ある醫師は、私が開業しても居ない癖に、かやうな書物を著はすのは亂暴だといふ意見をある雜誌で述べました。私はあまりの笑止さにそれについて返答をするだけの勇氣が出ず、そのまゝ默殺しましたが、若し私の今度の著述についても同樣の意見を持つ醫師があるならば、私はかゝる醫師に對しても前と同樣な態度をとつて、心の中でから〳〵と笑つてやらうと思ひます。私の「鬪病術」なるものは、一個の人間として肺病療養に關する私の意見を述べたものでありまして、醫者としての私の意見を述べたのでありません。この書も、それと同じやうに、醫者として慢性病の治療を說くのではなく、人間として慢性病の治療を說くのであります。ですから、皆さんは、私のこの態度を十分了解して下さつて、私の說くところに耳を傾けて頂きたいと思ひます。

近ごろ、印刷術の進步しました結果、雜誌に單行本に、醫學的知識があまねく紹介せられまして、皆さんの多くは一通りの醫學的知識を持つてゐいで

になるやうに見受けられます。それはまこゝに結構なこゝですが、それがため、皆さんは、なるべく新らしい且つ珍らしい學説や治療法が知りたいゝ思つておいでになるに違ひありません。即ち、皆さんは、私が、慢性病の治療に關して、何か奇拔な意見を述べるだらうゝ御期待なさつて下さるかも知れません。然し、若し果してさうであるゝするならば、それは大へんな誤りであります。何ゝなれば、私の申し上げるゝは、極めて平凡な、いはゞ常識的な、誰でも考へるゝの出來る意見であるからであります。

こゝろが、この常識的な、平々凡々な意見こそ、慢性病治療の際には、一ばん必要なものであります。のみならず、慢性病者に一ばん缺けて居るものは、即ち常識的な判斷であります。例へて申しますならば、慢性病には特効藥ゝいふものがありません。即ちかのマラリアに對するキニーネのやうに

みゝに病を治し得る藥劑ゝいふものがありません。何ゝなれば、もはや特効藥があれば、それは慢性病ではないのであります。して見れば、慢性病にかゝつた人が、それを治さうゝ思つて藥をのむゝは極めて愚なゝであります。こゝろが多くの慢性病の患者は、何か彼か藥をのんで居ります。時には、何のためにのむのかもわからないで、たゞむやみにのんで居る人があります。藥屋に金儲けさせるつもりならばよろしいけれゞ、若し自分の病氣を治すつもりであるならば、それはまこゝにゆゝしい問題であります。單に個人の安危の問題であるばかりでなく、國家經濟の上からいつても見逃がすべからざる問題であります。

まつたく、心を靜めて考へて見るに、現今神經衰弱なる病名のもゝに、臭劑をのまされて居る患者の數は莫大であるゝ思ひます。それゝ同時に臭劑

の消費さるゝ量も實に夥だしいであらうと思ひます。幸ひにまだ臭剝に飢饉を來したといふことを聞きませんからよいものの、そのうちには、地下の石炭と同じやうに、臭剝ものみ盡さるゝ時期が來るかも知れません。尤も石炭の消費と臭剝の消費とを同日に談ずることは、化學上から見れば甚だ適當ではありませんけれど、兎に角、ちつとも効力のない臭剝が神經衰弱の患者によつて貪るやうに攝取されて居るといふことは、あまり感心したことゝはいへません。

又、肺結核なる病名のもとに、如何に多くの藥劑が浪費されて居ることでせう。クレオソートなどは、幸ひに昨今少しく下火になつたやうですけれど、クレオソートは結核菌を殺す能力があるから、それを飲めば、體内の結核菌を殺すかも知れぬといふ、まことに雲をつかむやうな理由のもとに、以前はずいぶん浪費されました。結核菌を殺す能力のあるものをのんで結核がなほるものなら、煮ね湯や火をのめば當然結核はなほらねばならぬ、などゝいふ子供だましの議論までして見たくなるほど、變な現象がこの世の中に堂々として行はれて居るのであります。

なほ又、慢性胃腸病といふ名のもとに、どれだけ多くの消化劑が浪費されて居るかわかりません。折角、胃や腸が消化液を分泌して働かうとして居るところへ、なまじ消化劑を送りこまれるので、胃や腸はます〳〵なまけてしまひます。實に何といふ情ない現象でありませう。

すべてこれ等のことは、すべての人が少し常識を働かせて、少し靜かに考へて見れば、立派に防ぎ得るのであります。だから、私はこの平凡な理論をことさらにかつぎ出して皆さんの注意を促がさうとするのであります。

何ごなれば、この平凡な理論がはつきりわかりさへすれば、慢性病をなほすことは、極めて容易であるからであります。「道は近きにあり、これを遠きに求む」ご、先哲は誠めて下さいましたが、慢性病者の病に對する態度は、皆、近い道を遠きに求めて居るのであります。近い道を遠きに求めて居るだけで事が濟めばまだよろしいが、それがため、あたら命を失ふやうなことがあつては、まことに殘念なことだご思ひます。而も、殘念な死に方をして行く人は決して少なくありません。もごよりそれ等の人は、早くなほり度いご思つて、近い道を沒却して遠きに求めるのでありませうけれご、たゞ〳〵平凡に立ちかへることを忘れたゝめに、取り返しのつかぬ破目に陷るのであります。

ごころが、遠きに求むることをやめて、近き道を發見するごいふことは、理解は出來てもこれを實行することが困難なのであります。こゝに慢性病治療の一大難關が横はるのであります。まつたく理窟がわかつて居ても、實行しなければ何の役にも立ちません。治療ごいふことは申すまでもなく理論の問題でなくて實行の問題であります。ごころが多くの慢性病患者は新藥をすゝめられるときは、それを喜んでのむけれご、藥を捨てよごいふ忠告には容易に從ひ得ないのであります。これはむしろ、理論の問題でなくて、感情の問題ごいつた方がよいかも知れません。卽ち多くの慢性病者は、理窟は兎に角、藥を服んで居らねば情に於てしのびないのであります。この「理窟は兎に角」ごいふ心ほご恐ろしいものはありません。尤も理窟は兎に角、われは我の信ずるごころを實行するごいふ積極的な態度ならば、これは大に推奬すべきでありますけれご、藥をのんでならぬごいふが

如き消極的な事項に對して、「理窟は兎に角」がかつぎ出されるのはよくありません。だから多くの患者は、理窟は兎に角、みごとに死んで行くのであります。

それ故、私がこれから述べようとする平々凡々な理論も、之を實行しては じめて大きな價値を持つのであります。換言すれば、平凡な理論を實行する勇氣がありさへすれば、その人は、慢性病を退治する資格があるといつてよいのであります。

こころがこの慢性病を退治する資格を得る人は甚だ少ないのであります。若し、ごの人間にもその資格が具はつて居るものとすれば、世に慢性病なるものは、その跡を絶つべきものでありますが、事實に於ては、慢性病がその跡を絶たぬのみか、ます〳〵その數を增すやうな形跡があるのですから、

如何に慢性病を退治する資格を得ることがむづかしいかを知ることが出來るのであります。「實際慢性病を退治する資格を得るためには、その人は苦しでん苦しんで苦しみ拔かねばなりません。」苦しんで苦しんで苦しみ拔いたあげく、心機が一轉して、慢性病を退治しようといふ勇猛心が起つたときはじめて、その資格を得るのであります。然るに多くの慢性病者はいゝ加減に苦しんだときに、その苦しみのために生命を失つてしまふのですから、まことに殘念なことゝいはねばなりません。もう少し生命があつて、もう少し苦しんだなら、きつと慢性病退治の資格を得たであらうにと思はれる人が世の中には隨分澤山あるのであります。これは誠になげかはしいことであります。けれども致し方がありあません。

苦しんで苦しんで苦しみ拔くといふことはあながち肉體的の苦しみを

指すばかりではありません。即ち精神的の苦しみをも含んで居るのであります。換言すれば、慢性病者は、煩悶し抜く必要があるものであります。

然るに、通常、慢性病の治療に際しては、「なるべく精神を安靜に保て、煩悶を避けよ。」といふことが、肝要な忠言と見做されて居ります。これは私の考へでは、根本的な誤りであると思ひます。何となれば、病が一張一弛して、いつまでも治つて行かぬとき、その人の精神が健全である限り、煩悶しないでは居られないのであります。五年も十年も同じ病に苦しめられて居て、それで煩悶しない人があつたら、その人は、よほど頭腦がどうかして居る人でなくてはなりません。さういふ人に向つて、精神を安靜に保てとか、煩悶しないやうにせよとか忠告したつて、それは出來ない相談であります。だから私は慢性病者に向つては、煩悶しないやうにせよといふ忠告の正反對なる忠告をしたいと思ふのであります。即ち、「煩悶し、煩悶し、煩悶しつくしなさい。さうしたときはじめて治療の道が開けるから。」といひたいのであります。けだし煩悶し盡すといふことは、やがて煩悶を除く唯一の道だからであります。

ところが、多くの慢性病者は、僅かな煩悶を日々繰返して居るだけで、少しも徹底的に煩悶しないのであります。いくら藥をのんでも病氣がなほつて行かねば、その藥を思ひ切るべきでありますのに、いつ迄も、その藥に便つて居て煩悶して居るといふことは、いはゞ小さな煩悶であると思ひます。即ち、藥といふものに便つて居るだけ、煩悶が減らされて居るわけであります。之に反して藥が到底何の用をなさぬといふことを眞に理解すれば、怖ろしい絶望を感じ、從つて煩悶も絶大となるのでありますが、それと同時に、

當然其處に新らしい光明を認めることになるのであります。尤も人によつては、絶望を感じた瞬間に死んでしまふかも知れませんが、これはごうも致し方のないことであります。けれども大ていの人間は、絶望を感じたときに、心の底から一種の偉大なる力が迸り出づるものであります。いはゞ反抗の精神とでもいひますか、又は革命的の精神とでも言ひますか、兎に角、猛烈なる反抗心が起るものであります。さうしてこの反抗心が起つたとき、その人はそれによつて所謂活路を開き得るのであります。換言すれば、その人は怖ろしい慢性病から救はれるのであります。即ち慢性病の苦患からみごとに脱することが出來るのであります。

慢性病者が、自分以外の何ものにも頼ることが出來ぬことを切實に感じたとき、そこにはじめて、自己に具はる本來の力が湧くのであります。こころが多くの慢性病者の煩悶は、外界のものに、はかない頼みをかけて居ることから生ずるのが常であります。何となれば、すべての煩悶は期待を裏切られる時に生ずるからです。俗な言葉で言ふならば、思ふやうにならぬときに煩悶は起きるのであります。慢性病者は、藥劑に期待をかけて裏切られ、醫師に期待をかけて裏切られ、加持祈禱に期待をかけて裏切られ、その他あらゆる治療術に期待をかけて裏切られて居ります。けれども一通りはこれ等のものに期待をかけて見なくては、慢性病者は決して滿足しないのであります。だから、私は、此煩悶を重ねることに異議はないのであります。たゞ煩悶を重ねた後、依然として、それ等のいづれかに多少の期待を持つて居ることには贊成し難いのであります。一旦裏切られたならば、潔くあきらめるべきものでありますのに、例へば戀しい女に裏切られて、なほ且つ未

練を殘こといふやうな態度を取るのは、少くとも慢性病治療の際には禁物であります。未練はいはゞ小なる煩悶に過ぎません。之に反して絶望こそは大なる煩悶であり、從つて諦めを誘ひ出してくれる唯一の機緣であります。大なる煩悶の後に大なる諦めがあることは今更私の申すまでもないことでありますが、慢性病者は大なる煩悶を通過して大なる諦めに達することを躊躇するのが常であります。

世の中に何ものにも賴るべきものがなく、賴るべきは自分一人であるといふことを切實に感ずることは可なりに怖ろしいことであります。けれども、所詮自分より外に賴るべきものは何もありません。生れて來るときも自分一人なら、死ぬときも自分一人であります。どんなに自分が愛して居る人でも、物でも、要するにそれは自分以外のものでありまして、決して自分の煩悶を取り除いてはくれません。それはまことに悲しいことです。悲しいことですけれども、それが事實ですから致し方がありません。

だから、慢性病患者は、何よりも先に、自分一人であるといふことを痛感しなければなりません。痛感といふことは切實に感ずることであります。世の中は自分一人であるといふことを多くの人が口にしますけれども、それはたゞ理窟でさう思ふだけで、やつぱり期待を裏切られること、いたく憤慨したり、悲觀したりします。これは、自分一人であるといふことを切實に感じて居ない證據であります。慢性病者が藥は効かぬと知りながら、なほ且つ藥を思ひ切れないのは、藥が効かぬといふことを痛感しないからであります。

慢性病者の煩悶には、病氣に對する煩悶以外に種々雜多のものがありま

す。即ち生活上經濟上の煩悶、自己の周圍に對する煩悶、社會公共に對する煩悶、その他數へあければ際限のないほど澤山の煩悶があります。然しこれ等の煩悶は、結局、病氣が早く治癒して行かぬことから生ずるのでありまして、病氣に對する解決の道さへつけば、自然に解決の道がつく譯であります。だから、何といつても、病氣そのものに對する態度を定めることが一ばん肝要なのであります。

○　私は今、「慢性病に對する態度を定めよ」と申しましたが、慢性病の治療の際には、先づ慢性病に對する態度を定めることが一ばん肝要なのであります。容易に治らぬ病氣を治さうとあせるのは、善良な策とは言へないのでありまして、治すことを考へる前に、慢性病に如何に處して行くかといふことを考へるのが必要なのであります。如何に處して行くかといふことを考へさへすれば自然に治療の方針も立つのであります。

さあ、そこで、「如何に考へるか」といふ大きな問題が起つて來るのであります。多くの慢性病患者はどういふ譯か、靜かに考へることをしない傾向があります。尤も病人に限らず、一般の人々も、「考へる」といふことをあまりしないのが常であります。書物を讀みましても、多くは、その場限りの讀みつ放しで、讀んだことに就て少しも考へようとはしません。讀むよりも考へる方が、より多くを得られるといふことを知らぬせるか、或は又、考へるといふことは面倒なのか、どうも考へる人が割合に少ないやうに思ひます。從つて、慢性病に罹つても、病氣について冷靜な思考をめぐらせる人は至つて少ないのであります。本人は考へるつもりで居るかも知れませんが、それはたゞ慢然ととりとめのないことを考へるだけで、さような考へ方は、所

謂空想といふべきもので、思考とはいはれないのであります。徒らに空想を馳せて苦悶し、煩悶しても、冷靜に思考し、煩悶するものは甚だ少ないのであります。

慢性病者は、好んで慢性病のことの書いてある書物を貪り讀みます。例へば、神經衰弱の患者などは、神經衰弱に關する書物ならば、悉く見のがすまいとするほど熱心に讀みます。ところが、それほど熱心に書物を讀みながらも、一方に於て少しも考へようとはしません。だから書物はその讀者に却つて害を與へるのであります。何となれば、書物を讀んで考へないのは書物を鵜呑みにすることでありまして、書物を鵜呑みにすることは、毒藥を鵜呑みにするよりも危險だからであります。

書物は人間の書いたものでありますから、書き間違ひもありませうし、又書き足らぬところもありませう。だから私たちは、その書物を通じて、その著者の言はうと欲した精神を汲み取ればよいのであります。たとひ著者の言ひ廻しに不完全なところがあつても、又著者の書き方に間違つたところがあつても、一册の書物を讀み終つて、靜かに眼を閉ぢて考へたならば、その著者が何を言はうとして居るかを察することは決して難くはありません。即ち、その書物を通じて、その著者の精神を知ることは立派に出來るのでありまして、その著者の精神さへ汲みとることが出來れば、讀書の目的は達せられたといふべきであります。

ところが多くの人は、書物を讀んで、冷靜に考へることをしないためにその著者の精神を汲み取ることが出來ずして、其書に述べられてあるいはゞ形骸だけを記憶し、意外なる害を受け易いのであります。「悉く書を信ぜば

書なきに如かず」とは實に千古の名言でありまして、大抵の讀書子は、この言葉を心得て居ながら、なほ且つ悉く書を信じようとします。これは畢竟、書物を讀みつぱなして、少しも考へぬからでありまして、少しでも冷靜に考へて見たら、悉く書を信ずる氣にはなり得ないのであります。書物は單に「思考」の糧たるに過ぎぬものでして、若し書物をそのまゝその「人」の糧とすれば、その危害は甚だしいのであります。

慢性病患者は、その心が可なり疑ひ深くなつて居るのが常であります。だから書物を讀んだ際には、その中に書かれてあることを實行する前に、その疑ひ深い性質をもつて、よく考へよく疑ふべきであります。その結果、採用すべきところを採用し、捨つべきところを捨てゝ、自己の知識とすべきであります。然るに、他のことには疑ひ深い性質も、讀書の際にはあらはれないで、書物のために害を受けて居る慢性病患者が決して少くはありません。

さきに私の著した鬪病術に對して、二三の醫師から私に向つて、鬪病術のために害を受けた患者があるといふ通知がありました。その患者が果して、私の書物を讀んだゝめに害を受けたかどうかを判斷するのは一寸困難であらうと思ひますけれど、かりに私の著書のために眞に害を受けた患者があるとしましたならば、その患者は、「悉く書を信ずる」の弊に陷つたものといはねばなりません。鬪病術の要旨は、後章にあらためて述べますけれども、眞に私の言はうと思つて居る精神を汲み取つて下さつたならば、それがために害を受けるといふことは絶對に無いと私は信ずるのであります。

人間の精神を文字にあらはすといふことは難中の至難事でありまして、禪家の言葉に「不立文字」といふことがあるのも、禪の極意は、いはゞ以心傳心、

到底文字にはあらはせぬといふことを言つたのであらうと思ひます。同じ書物の中でも、著者は時として正反對に思へる言葉を使用しなければなりません。又實際の治療に當つても、同じ病氣に就いて、甲の人には「かく〳〵せよ」といふ忠告を與へ、乙の人には「かく〳〵してはならぬ」といふ忠告を與へねばならぬことがあります。然も著者の精神は一にして二ならずであります。假に、書物の中で甲に與へた忠告と乙に與へた忠告だけを讀んだとしたならば、著者の眞意はいづれにあるか、その判斷に苦しみますけれど、その書物を通讀して、その著者の意のあるところを靜かに考へて見たならば、正反對の言葉も、當然一つの精神から生れたといふことに氣附くのであります。昔から、「熟讀玩味」とか「眼光紙背に徹す」とかといふ言葉がありますけれど、まつたく、書物なるものは、紙背に徹する眼光をもつて、熟讀玩味しなければ、害のみあつて益のないものであります。書物を讀んでも、書物に讀まれてはなりません。闘病術を讀んで害を受けたからといつてそれで闘病術の價値を判斷されてははなはだ心外であります。

尤も、さういふ譯だからといつて、書物は不親切な書き方をしてよいといふ理窟は成り立ちません。書物はあくまで親切に書かねばならぬのでありますけれども、人間の能力には限りがありますから、書物の完全をのぞむよりも、書物の讀み方を定めて置く方が安全だといふのであります。書物の讀み方をさへ定めて置けば、どんな書物にも迷はされず、その書物の粹だけを拔き取つて利益を受くることが出來るのであります。

慢性病患者は、自分の惱んで居る慢性病について、十分なる思考をめぐらさなければならぬのでありますが、それには當然、慢性病について書かれて

ある書物を讀む必要が起つて來ます。從つて、書物に對しての態度を定めて置くといふことは極めて必要なことであります。健康な人はそれ程ではありませんが、慢性病患者は、書物を讀むのでなくて、「書物に讀まれ易い」のが常でありますから、一層の注意が要るのであります。「書物に讀まれる」といふことは一寸理解しにくいかも知れませんが、たとへば、神經衰弱の患者などは、書物に書かれてある色々な珍らしい症狀を讀んで、自分もたしかに、同じ症狀を持つて居ると信じ、恐怖を增すのが常でありまして、これなどはたしかに書物に讀まれた現象であります。かやうな人に對しては、書物はたゞ害をなすのみでありまして、少しも益はありません。

ですから、私がこれから述べようとすることに對しても、讀者の皆さんは私の書に讀まれない覺悟をして頂きたいと思ふのであります。いはゞ十分な警戒線を張つて讀んで頂きたいと思ふのであります。さもなければ恐らく、私のこの書も害を與へるに過ぎないであらうと思ひます。私の皆さんに望むところはこの書を手蔓として、慢性病に對する考へをはつきり定めてほしいと思ふだけであります。もとより、この書は、慢性病に對する考をはつきり定むるに足らぬ不完全なものであらうことは言迄もありませんが、この書によつて慢性病者が、慢性病について考へて見るといふ氣になつて下されば、私の目的は大半達せられたといつてよいのであります。

何となれば慢性病の治療といふことは、慢性病について靜かに考へることいふことだけで、すでに、その治療の道に一歩踏みこんだといつてよいからであります。私の考へでは、慢性病者は、心の持ち方、卽ち病氣に態する態度を定むることによつて、病を退治することが出來るのであります。たとひ

病を根本的に退治することが出來なくても、病と生命とを別物として生きて行くことが出來るやうになるのであります。病に拘泥さへしなければ、もはや病がないと同然であります。「さうして病に拘泥しなくなるためには、病に對する考へ方をきめて置けばよいのであります。」

私がこの書に說かうと思ふことは詮じつめて見れば、「慢性病者は如何に考ふべきか」といふことに歸するのであります。如何に考ふべきかといふことは、もとより、慢性病なるものを如何に考ふべきかといふだけには止まらず、慢性病者は如何に生きて行くべきかといふことをも含んで居ります。多くの慢性病者は病氣そのものに抱泥して居て、如何に生きて行くべきかについて考へる餘裕さへない有樣であります。病膏肓に入るといふことを昔の人はいひましたが、この言葉を私は生きることを考へる餘裕のない狀態であると解釋したいのであります。膏肓に入るといふ言葉は、膏は胸の下部、肓は胸の上部で、其處に病がはいると容易に平癒せぬといふ意味でありますが、昔の人は、胸や腹に精神があると認めましたから、病が膏肓に入るといふことは、病がその人の精神を虜にして、その人の考へる力を奪つた狀態であると謂つても、敢て牽强附會ではないと思ひます。まつたく、慢性病者の多くは、その精神が一種の迷妄に陷つて、考へる力を奪はれて居ります。つまらぬことを空想し恐怖することは知つて居ても、靜かに思考をめぐらせて、本來の自己に立ちかへり得ない人がその大部分を占めて居ります。病に對して愚痴をこぼすことだけ知つて居ても、病に對して冷靜な態度を取り、生きようとする計畫をする人が甚だ少ないのであります。

尤も、考へるといふことは實行を伴はねば何にもなりません。治療といい

ふことは實際の問題であつて思想の遊戯ではありません。思想の遊戯は徒らに人間を卑屈にするのみでありまして、慢性病者には却つて禁物であります。「善いと考へたが最後それを實行することに躊躇してはなりません。そこに偉大なる決心と勇氣とが要るのであります。」私は闘病術の中に、肺結核患者は、ある程度まで安靜を續けてなほらなかつたならば、そろ〳〵安靜を破つた方がよいといふことを述べました。「闘病」の精神が定まりさへすれば、これは當然、さうしなければならぬことになるのであります。ところが、長い間安靜を續けて居た人が安靜を破るには、少なからぬ決心と勇氣とを要します。從つて多くの肺病患者は、安靜を破るべきだと覺悟したときも、なほ且つ危惧を抱いて、いはゞ怖る怖る安靜を破ります。ところがこの怖る〳〵安靜を破ることは、却つて少なからぬ害があるのであります。「怖れて事を行ふといふことは、半ば危害を肯定しつゝ事に處することでありますから、」謂はゞ暗示的に當然害があらはれるといつてもよいと思ひます。私の闘病術を讀んで害を受けたといふ人は、恐らくその種の人ではあるまいかと私は思ふのであります。

それ故、考へた事を行ふに當つては、少しの危惧をも抱いてはならぬのであります。善いと信じて行はなければ、如何なることでも、善い結果を生む道理がありません。ところが慢性病患者が事を行ふ狀態を見ますと、多くは所謂、狐疑逡巡、即ち、「果して善いだらうか、惡くなりはしないだらうか」と、危ぶみ〳〵行つて居ります、これでは害があるのも當然であります。だから、慢性病の治療に際しては、異常時に際して私たちが執るやうな、勇敢な態度をもつて、事を行はねばならぬと思ふのであります。

異常時に、私たちは、いはゞ無我夢中に目的に向つて猛進し、平素出來ないことをも易々と仕遂げることが出來るのであります。曩に私は、たよるべきものは自分より外にないと覺悟すべきだと申しましたが、異常時には、まつたく他を顧みて居るいとまがありません。如何に安靜を續けねばならぬと思つてゐる患者でも、いざ、自分の病室に火がついたとなるならば、それでも安靜を續けるといふやうな愚なことは致すまいと思ひます。即ち我を忘れて、走り出すであらうと思ひます。この時の決心と勇氣がありさへすれば、慢性病治療は極めて容易なことだと思ふのであります。ところが、多くの慢性病患者はどうしてなか〳〵さういふ氣になれません、即ち何だか怖ろしいやうな氣がしてやれぬのであります。ひよつとそのまゝ死んでしまひはしないかといふ氣になつてそれだけの勇氣を持ち得ないのであります。これは畢竟「死」を怖れるからでありまして、こゝに於て私は一應、慢性病者の「死」に對する態度について考へて置きたいと思ふのであります。

人間が病氣について頭をなやますのは、いふ迄もなく死にたくないからであります。けれども、一方に於てすべての人は、いつかは必ず死なねばならぬといふことを心得て居ります。さうして、たとひ長生きをしたところが、どこまでも百歳まで生きることは至難だといふことも心得て居ります。死にたくないにも拘はらず死なねばならぬといふところに所謂死の恐怖が生ずるのでありまして、病氣に罹つたものは誰しも死の恐怖に脅かされ、何とかして死を避けようとする結果は、病氣そのものをも恐怖するに至るのであります。從つて疾病の恐怖は當然死の恐怖から起つたものといふこ

こが出來るのでありますけれど、慢性病に罹つたものゝ心理を解剖して見ますこ、疾病の恐怖こ死の恐怖こは、必ずしも聯絡して居ないのであります。即ち、慢性病者の多くは、初めは死を恐怖しても、後には死こ無關係に病氣を恐怖し、遂には恐怖するここを恐怖するやうになり易いのであります。

それ故、慢性病者は、その根本に遡つて、死こいふものに對して、よく〳〵その考慮をめぐらすべきものであるこ思ひます。死に對しての態度をはつきり定めるこいふここは、慢性病者にこつて、實に大切なここであるこ思ひます。死に對する態度を定めないで、慢性病の治療を論ずるこいふここは、陸の上で水泳を論ずるこ同じく愚なここであります。こころが多くの慢性病者を見ますこ、ちつこも、死に對する態度が定まつて居ないのであります。換言すれば、死こいふここに對して、はなはだぼんやりして居るのであります。尤も中には死こいふここを考へるさへ恐ろしくてならぬ人があります、やむを得ないにしても、本當に生きるここを考へるには、先づ死について考へねばなりません。何こなれば、死に對する態度が決まれば、慢性病の退治は極めて容易こなるからであります。

然らば、慢性病者は、死に對してどんな態度を執るべきであるかこ申しますに、思ひ切つて言へば、「何時死んでもよいこいふ決心を定めるここであります。」ここに慢性病のうちでも、肺結核の如きものは、完全なる治癒は多くの場合望み得ないのでありまして、昔の人の言葉でいふならば、いはゞ「死病」でありますから、いつ何時病が急激に惡化して來ないこも限りません。それ故さうした場合、少しも狼狽せず、從容こして死に就くの覺悟がなくてはならぬのであります。私が闘病術の中で、生きんこする意志を樹てるこ

こが、肺結核療養に關して最も肝要だこ申しましたら、患者の中には、この言葉の中に死を度外視し、死を避ける意味が含まれて居るものこ誤解した人が少なくはありませんでした。生きんこする意志を樹立することは、決して死を避けるごこを意味するのではありません。生きんがためには死をも敢て辭せぬこいふ心になつてこそ、はじめて生きんこする意志が完全に樹立されるのであります。死を辭せないで生きるこいふごこは、一寸考へるこ矛盾して居るやうでありますが、むかしから行はれて居る生死を超越するこいふ言葉は、この心持ちこ同じだこいつてよいのであります。死んでもかまはぬから、我は我が考へたこころのごこを實行するこいふ勇氣が出てこそ、はじめて難病の退治が出來るのであります。かやうな勇猛心について、よく悲壯な心こいふ言葉が用ひられますが、慢性病患者は、この悲壯な心を持たねば到底、自分の罹つて居る難病を征服するごこは出來ないのであります。

よく肺病患者などは、醫師から、肺病であるこいふ宣告を受けたこき、「死を覺悟する」こ申しますが、一人こして本當に死を覺悟するものは居りません。卽ち死の覺悟でなくて死への接近に過ぎないのであります。何こなれば死を覺悟したこいひ乍ら、多くの患者は藥をのんで居ります。死を覺悟したならば、潔く死ねばよいものを、藥をのむのはごう考へて見てもおかしいのであります。本當に死を覺悟すれば、ごんな難病だつて征服出來る筈です、死をさへ覺悟すれば、苦痛を訴ふるごこも、治らぬごこを悲觀するごこも、敢てしない筈だからであります。慢性病の際、苦痛を苦痛こして肯定し、不治を不治こして肯定するくらゐ心强いごこはありません。苦痛を肯定し、

不治を肯定し、その上、いつ何時でも死を迎へる決心がついたならば、もはやその人は病人とはいへないではありませんか。

ごうせ人間は一度は必ず死なねばなりません。さうしてたとひ平素健康を誇つて居る人でも、いつ何時頓死しないとも限りません。だからたとひ健康な人でも死の覺悟は必要であります。況んや病人には尙更死の覺悟が必要であります。而も健康時に死の覺悟を持つことは容易ではありませんけれど、病氣の時に死の覺悟を持つことは、比較的容易でありますから、慢性病者は、常に喜んで死を迎へるだけの決心を持つべきであらうと思ひます。

けれども喜んで死を迎へるといふことは、早く死に近づくといふ意味では決してありません。死に近づく前に出來るだけ生に苦しむ必要があるのであります。何となれば、死は人間に與へられた最も安樂な境地でありまして、早くこの安樂な世界を求めるといふことは、いはゞ一種の逃避的態度であります。死は易く生は難しと申しますほり、生の苦しみを逃れようとして死を求めることは甚だ卑怯であると思ひます。

それ故死を覺悟するといふことは、生の苦しみを出來得る限り苦しみ拔いて、そのあげく、ちつとも騷がず死ぬといふことを意味するのであります。こころが多くの患者は、死を覺悟して生の苦しみを避け、もつて一日も早く死なうとして居ります。さうして、實は心の中では、生の苦しみをも避け、あはせて死をも避けようとします。これでは到底難病が治る譯はなく、天は氣を利かせて、早く安樂の世界を與へてやらうとするのであります。

死に對する態度が定まつたならば、どんな冒險をも敢てすることが出來

ます。人が西へ行くといつた場合、我一人平然として東へ行くことが出來ます。人が安靜萬能の治療法を講じて居るとき、我一人安靜を破つて、生の苦痛を心ゆくばかりに味ふことが出來ます。かうなれば、もはや慢性病も何もあつたものではありません。病氣にこだはる心がさらりとなくなり苦痛の快感を味ふことさへ出來て、生の喜びにつかることが出來るのであります。早く治らぬといふ不平を抱く必要もなければ、いら〳〵する必要もなくなり、はじめて精神的の安靜を得るのであります。

慢性患者には、それ故冒險といふことが何よりも必要であります。人がよせといつたことでもかまはず行つて見るといふ冒險的決心が出來ればもはや難病も患ふに足りません。かういふと心ある人は、それは無茶である、無謀であるといふかも知れません。然しよく慢性病について考へた上に、意識して無謀なことを行はねば、到底難病は退治出來るものでないと思ふのであります。何をやつても病が治つて行かぬとき、なほ且つ、駄目な方法を試みることは愚なことゝいはねばなりません。だから、その際、思ひ切つて突飛な行動を試みることは當然必要なことであらうと思ひます。まつたく、年來の難病が、思ひ切つた治療法によつて治つたといふ例は極めて多いのでありまして、考へに考へた上で、意識して無茶を行ふことは、慢性病治療に缺くべからざるものであると思ひます。長い間胃腸を患つて居る人は、消化劑をのんだり、柔かいものを食べたりして居ては、到底治るものではありませんから、冒險心を奮起して、思ひ切つて、不消化と稱せられて居る物を食べて見るのも一策であると私は信ずるのであります。これは一見無茶に見ゆても、その實無茶では決してありません。消化劑をのんだり柔

かいものを食つたりしては治らぬ胃腸病を、その上なほ消化劑と柔かいもので治さうとするのはごう考へて見ても間違つて居るのであります。これ程簡單な理窟はないのに、この理窟のよくのみ込めぬ人が可なりに多いのであります。さういふと皆さんは、柔かいものを食つてさへ治らぬのにその上不消化なものを食つたら尙更いけないではないかと反駁されるにちがひありません。が、それは實は、理詰めであつて、その實理詰ではないのであります。人間といふものを機械と同一視した、極めて淺はかな考に過ぎないのであります。消化がよいとか悪いとかいふことは、食物の性質によつて定まるのではなくて、むしろその人の精神狀態によつて定まるのであります。飜然と悟るところあつて、從來のものとは似ても似つかぬものを攝つたならば、恐らくは、胃腸は別の力を發揮して消化を營むにちがひありません。これはいはゞ理外の理のやうに考へられますれど、人間の生命といふものは、實は理外の理によつて成立つて居るのであります。理外の理が行はれて居ればこそ、難治の病でも、みごとに治ることがあるのであります。

だから私は、慢性病者に、意識した無茶を行へとすゝめるものであります。無茶を行ふといふことは、愚に返らねばなりません、從つて私は慢性病治療のモットーとして

「之を考ふるに賢に、之を行ふに愚なるべし」といふ言葉を提唱するのであります。考へるときは出來るだけ正しく考へ、その考へを實行するには、愚者とならねばならぬといふのであります。例へば慢性病に藥が効かぬと考へたなら斷然藥を廢すべきでありますから、人から馬鹿といはれても何

こいはれてもかまはず藥を廢すべきであります。慢性病に藥が利かぬこわかれば、藥を廢すべきことは正しい、且つ賢い考であります。こころが多くの人は、之を行ふときに、その賢こさが祟つて容易に廢藥を實行しません。從つて廢藥を實行するには、どうしても馬鹿にならねばならぬのであります。むかし法然上人は、たしか「淨土往生には賢いのは惡い」こいふ意味のことを仰せられたときゝますが、慢性病治療の實際に當つても、賢いのは惡いのであります。多くの人は考へるにも賢く、實行するにも賢いから、いはゞ智恵まけがして病を重らせて居るのであります。相撲に力敗けこいふ言葉がありますが、慢性病者の殆んど多くは智恵敗けをして、悲慘な狀態に陷つて居ります。

突飛な方法を實行するときには、それ故わざこ、色々の智識を押へつける必要があります。智識で慢性病がなほるものなら、醫學の發達したこいはれる今の世の中に、病氣はだん〳〵減少して行つて然るべきであります。然るに、慢性病は減少どころか益々增加しようこして居ます。これは卽ち智識ではある種の慢性病はなほらぬ證據だこいつても敢て過言ではないこ思ひます。

だから、慢性病者は、どうしても、我こ我が身に勇猛心を奮起せしめて、從來の治療法に反抗する治療法を試みる必要が起つて來るのであります。人間の長い間の經驗こいふものは甚だ尊いものであります。けれども、その尊い經驗をもつてしても、なほ且つ病氣がなほらぬこき、その經驗に對して疑惑を抱いても、ちつこも差支ないこだこ思ひます。人間こいふものは、兎角、「傳統」に支配され易いのでありますが、慢性病の治療に際して、傳統に

支配されるといふことは、決してよいことではありません。

だから慢性病を治さうと思へば傳統を破ることを心懸けねばなりません。傳統を破ることは卽ち革命でありまして、慢性病の治療は心身の革命をまつてはじめてその目的が達せられるのであります。盤根錯節を絕つには、よほどよく切れる刀を要すと同じく、心身に喰ひ入つて居る慢性病を根絕せしむるには、思ひ切つた荒療治をする必要があります。さうして、この荒療治をするには、どうしても愚に返らねばならぬのであります。慢性病患者はすべからく、愚者となつて、心身に思ひ切つた革命を起すべきであります。

私は大正四年の末肺結核にかゝつて、今日まで十一ヶ年あまり、慢性病に惱んで來ました。さうして現に私は、同じ病に惱まされつゝありますが、幸ひに生きて行くには左程の支障を覺ゑません。然し、私はいつなん時、病に敗けて斃れるかも知れませんから、その覺悟だけはして居ります。さうして、苦しさに安んじて日々最大の努力をしつゝ生きて居ります。それと同時に、苦しさに安んじて最大の努力をすることが、やがては肺病を喰ひとめる最良の方法であると信じて居ります。この信念を基として私は闘病術を書いたのでありますが、たゞひ實地醫家から非難があるとはいへ、私はまだこの信念を變へぬものであります。

然し私は、結核には經驗がありましても、他の慢性病には經驗がないのであります。私はこれ迄一度も、所謂神經衰弱と稱するものにかゝつたこともなく、又慢性の胃腸病やその他の慢性の病氣にかゝつたことがありません。けれども、慢性病者の心持ちだけは、おぼろげながら理解することが出

來ることを思ひます。書物を讀み、或は慢性病患者に接して、慢性病者の心情についてて考へて見ました結果、凡そ、慢性病者の惱みがどんなところにあるか、又、慢性病の治療し難い原因がいづくにあるかといふことも、大たい見當をつけ得られたやうに思ひます。だから私はこの書を敢て公にするに至つたのでありますが、切實に各種の病苦を味つたことがないのですから可なりに見當ちがひなことを書くかも知れません。然し、前にも述べましたことほり、一個の人間として、慢性病治療に關する批評をするつもりでありますから、私の眞意は、よく皆さんにわかつて頂けるであらうと思ひます。

私は鬪病術の中で、可なりに多く獨斷的なことを書きました。それがため多くの人から非難を受けましたが、難病退治は、「獨斷的」でなくては到底その目的を達し得ないのであります。私は結核の熱はむしろ歡迎すべきものだといふやうな暴言(?)を敢て書きましたが、熱を避けようとして居たことて到底熱が去らぬものなら、熱は歡迎すべきものだといふ獨斷的の理窟(眞實の意味からいへば獨斷ではないかも知れませんが、從來の醫學的の學說から見れば當然獨斷といふべきものです)でもつけて心を安んじて居た方が遙かに得策だといふのであります。本書に於ても私はこれに似た獨斷的の意見を述べるかも知れませんが、要するに、學說を離れて實行上のことを述べるためには、やむを得ないことゝ思つて頂かなければなりません。慢性病者は百の理論よりも一の實際的方法を渴望して居ります。だから、私は徒らに理論に煩はされない實行的方法を述べようと思ふのであります。

それかといつて、私は決して不合理なことを述べるつもりではありませ

ん。常識と普通のロジックによつて誰にも判斷のつく理論から割り出された實行方法を述べるに過ぎません。だから、私の述べることは、恐らく皆さんのすでに承知して居られる所であらうと思ひます。ところが慢性病者は、通常むつかしい議論を有難がつて、平凡な議論を有難がりません。これがやがて、慢性病の難治である所以となるのでありますから、私は出來得る限り、平易な理論を述べようとするのであります。

獨斷といへば、私の獨斷的意見を讀まれる醫家の中には、私の獨斷が、私の結核の然らしめる所であると判斷される方があるかもしれません。何となれば精神病學者の說くところによりますと、結核菌が體内に增殖して生じた所謂結核菌毒素は、大腦皮質の神經細胞を麻痺せしめ易いものださうでありまして、それがため精神に異常を來し易く、若し精神に異常を來した場合には、自分はねらいものだといふ所謂自己感覺が高まり、冷靜な判斷力がにぶり、自分の意見はどこまでも正しいものだと主張するやうになるさうだからであります。ここによると、私も、實際この結核性の精神病に罹つて居るかも知れませんが、私は然し、決して自說をどこまでも主張するといふやうなことは致しません。闘病術に對する非難はまだ不幸にして、私を首肯せしむるものに出逢ひませんから、取り消しませんけれども、若し本當に私を首肯せしめるに足る意見が出ましたならば、私はいさぎよく取り消します。本書に於て述べようとする意見も、決してそれを是が非でも通さうとするのではありません。私は斯く考へ、斯く行つたらどうかと考へるが皆さんは如何に考へられるかと、いはゞ相談をかけるに過ぎません。

むかしは同病相隣れむといふことを申しましたが、私は同病相愛すると

いふ態度をもつて慢性病者に接したいと思ひます。御互によく相談して一日も早く苦患からまぬがれる道を講ずることは、同病者相互の義務であらうと思ひます。苦患からまぬがれると申しましても、決して苦患をなくすることではなく、苦患を肯定することも苦患からまぬがれる一種の方法なのですが、兎に角、私は、讀者の皆さんに、思考の糧をあたへて、それによつて慢性病治療の道に第一歩を踏みこんで頂きたいと思ふのであります。

人間といふものは、みんな自分の作つた錯覺や幻影のために苦しむものであります。ここに慢性病者に於て、この傾向が著しいのであります。即ち多くの慢性病者は自己の迷妄のために苦しみ、あたら生命を損耗せしめて居ります。だから慢性病者は一日も早く本來の自己に立ちかへらねばなりません。それには、正しい常識的判斷を、自分の一つ一つの行動に下して行けばよいのであります。尤も中には、常識的判斷を下すことの出來ぬほど、深い迷妄に陷つて居る人もありますけれど、所詮はやはり、本來の自己にもどることが出來ると思ひます。ルッソーは「自然に還れ」と申しましたが、私は慢性病患者に向つて、「自己に還れ」と叫びかけようと思ひます。

とり逃がした自己を取り戻すこと、これが慢性病治療の急務の一つであります。慢性病患者が、われとわが身の處置に困つて居るのは、あまりにも、現代の醫術やその他の事情に壓迫されて、自己を沒却し過ぎて居るからであります。自己を取り戻すといふことはやがては、勇猛心を奮起させることゝもなります。赤裸々な自己にかへつて、周圍に絶望を感じたとき、ごうしたとて、其處に偉大なる決心が湧かざるを得ないのであります。

私がこの書を著はすに至つた動機も、要するに、慢性病者が自己に還るよ

すがこなりたいこいふに過ぎません。さうして慢性病者を自己に還らせるには、何の珍らしい學說も要らないのでありますが、そこが、又、妙なもので、醫學博士などゝいふ肩書きを持つて居ること、平凡な意見にでも耳を傾けて貰ひやすいから、私は私のこの有利な立場を利用して、敢て平凡な說を述べようこするのであります。尤も之れによつて、慢性病に罹つて居る人が多少なりこも治療上に光明を認めて下さつたならば、私が自分の有利な立場を利用したここも、さほど大きな罪にはならぬこ思ひます。

第二章　現代の醫學は何を爲しつゝあるか

一、醫學的知識の成り立ち

慢性病に罹つた人々の中で、現代の醫學又は醫術に對してはげしい失望をいだかないものは、恐らく一人もあるまいこ思ひます。こころが多くの患者は、醫術に失望をしながらも、尙ほ且醫術に賴らうこします。醫者を心で呪ひながらも醫者の診察を受け、藥は駄目だこ思ひながらも、藥をのんで居ります。冷靜になつて考へればこれ程變なここはないのでありますが、それが平然こして行はれて居るこころに、慢性病治療の難點が横はつて居るのであります。換言すれば慢性病が難治である所以は、患者が現代の醫學及び醫術を信じ過ぎて居るこころにあるのであります。「文化」こいひ「文明の發達」こいひ、又は「日進月歩の科學」なごこいふ言葉が、患者の精神を曇らせて、現代の醫學の何處かに、偉大なる力がしのびかくれて居るやうに思つて居るからであります。

然し、患者がさう思ふのも決して無理ではありません。醫學は實際他の

科學と共に、西洋で言へば十九世紀以後、目まぐろしい程の發達を遂げたのであります。それまで少しもわかつて居なかつた病因が次々に明かにされ、それに對する特種の療法が發達して來たことは今更私の言ふ迄もないことだと思ひます。かの各種の病原細菌の發見と血清療法の如きその著しいものでありまして、その昔は疫鬼とか、惡魔の所爲とのみ思はれて居た病氣が一種の微生物の寄生によるものであることがわかつて、從つて、その病氣を未然に防ぐことさへ出來るやうになつたことは、何といつても現代醫學の一大恩惠であると共に、醫學の驚異的發達を示すものであります。ですから、現代醫學に對して、お互に心から信用をおく氣になるのは當然のことであります。

ところが、殘念ながら、一方に於て、これほどよく發達した醫學も、一方には、

好ましからぬ暗黑面を持つて居るのであります。それが何であるかと申しますと、病氣の原因だけ明かになつて、その治療法が明かになつて居ないことであります。醫學の眞の目的は病氣を治すことであつて、病氣の原因を知ることではありませんが、病氣を治すには、その原因を知らねばなりませんから、先づ病因探究に力がそゝがれ、次にその治療の道が講ぜられるのでありますが、難治の病のうちには、原因だけ明かになつて、まだ治療の道が少しもわかつて居ないのがあります。ですから、かゝる病にかゝつた者は、病因だけを示されて、救はれる道を示されないために、徒らに恐怖心ばかりを增すの弊害を生ずるのであります。換言すれば、醫學の恩惠に浴せずして却つて醫學の害毒を蒙ることになるのであります。例へば結核患者の如きは、醫學の害毒を蒙つて居る著しい例であります。病因たる結核菌の

性質も、感染の經路も、病氣の經過も、よほどの程度まで明かになつて居りながら、その治療法は依然として發見されないのであります。

原因を知つて居て、それを除き得ないのは、それを知らないで除き得ないときよりも遙かに恐ろしいものであります。ですから多くの結核患者は甚だしい恐怖心に襲はれるのであります。そうしてその恐怖は、いよ〳〵病氣を惡化するに役立つのみでありまして、現代の慢性病者の多くは、この意味に於て、現代の醫學のために却つて禍を受けて居るといつてもよいのであります。換言すれば、病氣を治すべき醫學が反對に病氣を惡化するに役立つて居るやうな譯であります。

その證據に、醫師の數は日毎にますます多くなつて行きます。「醫は醫なきを期する」のが本來の道であるのに、醫學が發達して、醫師の數が殖ゑるといふことは、實に皮肉な現象といはねばなりません。もとより人口の增加と共に醫師も殖ゑなくてはならぬ筈ですが、醫師が殖ゑるといふ現象は少なくとも喜ぶべきことではないと思ひます。

この一事から見ましても現今の醫學なるものが、謳歌に値するものでないことは明かですし、醫學に對して過分の信用をおくべきものでないといふこともよくわかるのであります。最近の科學の發達は實に驚くべきものがありまして、ここに電氣學とその應用方面のめまぐるしい程の進歩は、醫學に對しても同樣な信仰を持たしめ易いのであります。又、實際に於て、例へばレントゲン線の偉効の如き、私たちは二十世紀に生れた喜びを感ずるほどであります。だから、醫學なるものについて、だゞ慢然と考へて居る素人は、現代の醫學はどんな難病でも治してくれるであらうと考へます。

何か良い方法があるにちがひないだらうと推察します。

それ故、さうした心のいはゞ弱點に乘じて色々の新奇な名をもつた藥劑や治療法が新聞雜誌に廣告されると、患者はそれにつりこまれて、高い金を出して買つて見る氣になるのであります。外國語の名前のついた複雜な機械などの廣告を見ると、それがいかにも靈妙な作用をもつて居るかのやうに思ふのも當然のことであります。

この弊害から脫する爲には、何よりも先づ第一に醫學的知識なるものが、現代の程度に達するには、どんな階段を經て來たか、卽ち現今の醫學的知識なるものは、どうして得られたものであるかと云ふことを一應知つて置く必要があるのであります。

云ふ迄もなく私達人間の持つてゐる知識なるものは、醫學的知識に限らず、すべて人間自身が苦心し、努力し、辛い經驗を舐め恐ろしい犧牲を拂つて得たものでありまして、決して神樣から授つたものでも、又佛樣から賜つたものでもありません。それ故如何なる時代の知識でもその知識は絕對に正しいものであるといふ事は出來ないのであります。卽ちどの知識でもみんな不完全を免れ得ないのであります。もつと突き込んで云ふならば、我々が正しいと思つてゐる知識でもその實間違ひだらけであります。皆さんも御承知の通り、三百年前にイギリスのニュートンの發見した運動の三法則はついこの頃迄は絕對に正しいものである、萬古不易のものである、動かす可からざる眞理を含んだものと考へられてゐたのであります。ところがこのニュートンの三法則もアインシュタインの相對性原理に依つて修正を加へられなければならぬやうになりました。これは物理學の方

面のほんの一例に過ぎませぬけれ共、このやうに昨日迄正しいと信ぜられてゐた學說を今日から間違つて居ると見なさねばならぬことはふ實例は、その他の學問に於ても數へ切れぬ程澤山あるのであります。殊に生物學や醫學の方面に於ては、今迄この樣な例が著しく多かつたのであります。申す迄もなく總て科學的知識なるものは主として觀察や推理や實驗等からして得られるものでありまして、觀察する材料に限りがあり、實驗する能力に限りのある以上、それに依つて得られた知識はどうしても缺點を免れることが出來ない譯であります。

皆さんは生物進化論を大成したダーウィンを御承知でありませう。ダーウィンが如何に熱心な觀察者であつたかと云ふことは、例へば、蚯蚓の土地を耕す作用を研究するために前後三十年といふ長い日子を費した事でも分るのでして、彼が生物進化の理を立てるためには實に人力の及ぶ限りの觀察を重ねたのでありますが、それでも彼の觀察には尙以つて不行屆な所があつたのであります。例へて見ますならば、遺傳の現象の中に「突然變化」といふことがあつて、是は生物の子孫に、その親と、似ても似つかぬ性質を持つたものを生ずる現象でありますが、ダーウィンはこの現象を目擊したことがあるにも拘はらず、それを一種の自然の惡戲であると考へ、重要なものでないときめてしまつたのであります。從つてダーウィンの遺傳學說に依りますと、生物は親から子に向つて徐々に性質を變化するもので、決して突飛な變化、卽ち俗に云ふ鳶が鷹を生むといふやうなことはないと結論したのであります。ところがその後の研究に依りますと、ダーウィンが自然の惡戲として見逃した「突然變化」は遺傳學上最も重要な意義を持つも

のであること云ふことが、わかつて來たのであります。即ち生物に突然新らしく生じた性質は、それ以後代々子孫にその性質を遺傳して行くこいふ事がわかつたのであります。考へやうに依つては、生物の中にある遺傳物質なるものは、決して外界の支配を受けないで宛然それ自身一種の意志を持つてゐるかのやうに、而も自由に思ふ通りに變化する力を持つてゐるかのやうに、考へても差支へないやうになつて來たのであります。

これこ同じく、現今の醫師が持つて居る醫學的知識なるものは、今は正しいこ考へられてゐても、いつ何時正しくないこいふ證據が出ないこも限らないのであります。

こは云ふものゝ私は總ての醫學的知識を間違ひだらけのものこして輕蔑せよこいふのではありません。それのみかこれ迄人間が千辛萬苦を嘗めて築き上げた知識に對しては何人にも劣らぬ大きな尊敬を拂ふものであります。こかく人間は一局部を見て全體を左右せやうこいふ弊がありますが、正しいここは正しい、間違つたここは間違つて居るこして、その間にはつきりこした區別を立てる必要があります。現今の醫學的知識の中に間違つた事、或は將來間違つて居るであらうこ判斷されるここが含まれて居るこ知つて、醫學的知識全體を輕蔑するここはよくないここであります。只無暗に科學的知識を尊敬し科學を萬能であるこ思ふ人があり易いので、特に茲に注意をしたまでゞあります。尚又反對に科學知識をあてにならぬこ思ひかけるこ、正しい事迄も間違つて居るかのやうに見做して科學を一も二もなく排斥しやうこする人があり易いから、これ等の人に對しても特にこれだけの注意をして置きたいこ思ふのであります。

慢性病に罹つて現今の醫學に絶望を感じた場合には、總ての醫學的知識を排斥しやうと云ふ心が生じ易いものでありますから皆さんもよく注意をして欲しいと思ひます。要するに私達は醫學的知識に對して、過分の信用を置いてならぬと同時に一面に於て醫學的知識を尊重することをも忘れてならぬのであります。さもないと病を治す上に於てくだらぬ障碍に出合ふことになるのであります。

扨、そこで私は醫學が太古から今日に至る迄どんな風にして發達したかと云ふことを一應述べて置きたいと思ふのであります。

支那の傳説に依りますと、神農氏が百草を舐めて一々の病氣に對する藥劑を發見したといふやうに書かれ居りますが、原始時代の人類は所謂まぐれ當りの經驗に依つて疾病を治す術を知つたのに違ひありません。例へば犬が物を食べすぎて路傍の一種の草を食べさうして胃の内容物を吐くのを見て、その草を吐劑として用ふるやうになつた、と云ふやうなことが行はれたことは想像するに難くありません。大國主命が皮を剝がれてあかはだかにされた白兎にがまの穗綿を御用ひになつたと云ふ傳説もこの間の消息を語るものと考へても差支へないと思ひます。

原始人類は今日の人間程に物を考へる力は發達してゐなかつたやうでありますが、それでも病氣といふことに就て彼等がある程度迄一種の考へを持つてゐたことは想像するに難くありません。で彼等が病氣に就いてどんな考へを持つてゐたゞらうかと考へますと、もとより想像するに過ぎないことでありますけれ共、彼等は病氣といふものを比較的簡單に考へてゐたであらうと思ひます。即ち彼等は病氣の時に起る症候を病氣そのも

のゝ考へたのにちがひありません。ですから症候を鎭めるための種々な藥草が發見され、その症候が鎭まれば病氣は治つたゝ考へたのであります。けれ共當然同じ症候を持つてゐる患者に、同じ藥を與へても治らぬ場合がありますので、いろ〳〵の藥を調合して飲むゝいふことが考へられるやうになりました。しかしどんなに知惠を絞つて調合しても矢張り病氣が治らずに死んで行きますので、病氣ゝいふものはどうして起るだらうか、どうしたならば病氣を治すことが出來るであらうか、ゝ云ふことに自然頭を使ふやうになつたのであります。その結果彼等の自然物に對する恐怖心は病氣をもつて神樣が人間の罪を罰するために與へられたものであるゝ考へ、所謂加持、祈禱に依つて病氣を治さうゝ工夫するに到りました。殊に猖獗な傳染病が流行して一時に多數の人が死ぬやうな場合にはどうしても神樣のお怒りゝ考へざるを得なかつたのであります。さうして遂には醫學なるものは謂はゞ宗教ゝ結びついてしまつたのであります。

ゝころが今から二千數百年の昔希臘にヒッポクラテスゝいふ人が出て病氣を治すには宗教の力を籍りる必要は毫もない、只病氣をあるが儘に出來るだけ詳しく觀察して、その依つて來たるゝころを考へ、それに從つて適當な治療の道を講ずればよいゝ叫び、現今の科學的な醫學の謂はば元祖ゝなつたのであります。ゝころがキリスト教が生れて、再度醫學は觀察の學問でなくなつて來たのであります。さうして當然醫學は宗教ゝ提携し、治病は僧侶の手に委ねられてしまひました。かの妖術ゝか魔術が治療に應用されたのもこの時期でありまして、約一千數百年の間世の中は暗黑で所謂西洋中世の暗黑時代をなしたのであります。けれ共早晩斯樣な時代は

覆へされるべき運命にあるもので、遂に文藝復興期がこれに代り、人間が人間としての自覺をすると同時に醫學もヒポクラテスに依つて建てられた觀察を主とする學問にかへり、殊に十七世紀に至つて英國にシデナムと云ふ有名な内科醫が出て、專ら詳しい觀察に依つて病の原因を知り、その治療の途を講ずるに至つたのであります。

恰度その頃、顯微鏡が事物の觀察に應用されるやうになつて、頓に醫學的知識は豐富になつたのであります。殊に生物體を構成するものは微細な細胞であるといふことが分り、遂に十九世紀に至つて總ての生物は細胞から生ずるといふ所謂シュワン及びシュライデン両氏の細胞學說なるものが建設され、それと同時にウィルヒヤウといふ病理學者の所謂細胞病理學なるものが建設されました。細胞病理學なるものは一言にして云へば、人間の病氣は人間を構成してゐる細胞が病氣をするのであるといふ說で、何んでもない事のやうでありますが、一種の革命的な學說なのであります。ヒツポクラテス時代には人間は數種の性質を異にした液體から成つてゐて、その液體の調和が破れた時、病氣が生ずるといふ所謂液體病理學說が行はれて、それがその時迄依然として人々に信じられてゐたのでありますが、ウィルヒヤウに依つてその說は破られ細胞病理學說がこれに代つたのであります。

一方に於て顯微鏡の應用は各種の病原細菌の發見を促し、ある種の病氣は微生物の寄生に依つて起ることが分り、コッホやパストール等の偉大な學者に依つて細菌學、免疫學が建設されると同時に、寄生した細菌を殺すべき特殊の治療法卽ち所謂血清療法が發見され、それから今日迄めまぐるし

い程の各種の發見がなし遂げられたのであります。

一方十九世紀になつて各種の自然科學の發達と共に從來は觀察のみに依つて得られた科學的知識が實驗に依つて急に增加されることがわかり、醫學の領域に於ても動物實驗なることが盛んに行はれるに至つたのであります。ヒツポクラテスのやうな偉人でも只物事をあるが儘に觀察しただけでありまして、こちらの考へをその物事に働かせて、如何なる反應が生ずるかを觀察することを知らなかつたのであります。ところが十九世紀のフランスの生理學者クロード・ベルナールはこちらの考へを働かせて、物事を觀察する所謂實驗なることを醫學方面に應用したのであります。例へて見ますならば、現今盛んに研究されるに至つた各種の內分泌腺の機能の如きものは、實驗的研究に依らねばどうしてもこれを知る事が出來ないのであります。卽ちその內分泌腺を人體から取り除いて、その後に起る人體の變化をよく觀察すれば、その內分泌腺がどういふ働きを持つてゐるかと云ふことが明かにわかるのであります。同じ時に生れた二匹の犬の內、一匹の犬の甲狀腺を取り除きますと、取り除かれた方の犬は他の犬に比してその發育が非常に遲れるのであります。これに依つて甲狀腺なるものはそれを持つて居る動物の發育を司るといふことがわかります。

この實驗方法が更に進んで最近では各方面の大家が出まして、あらかじめ自分の頭の中で說を立てゝ、それを實驗に依つて證明し、さうして新らしい知識を加へようとする傾向になつて來たのであります。たとへて云ふならば物理學では、アインシュタインの相對性原理・醫學ではエールリツヒの化學的療法がその著しいものと云つてよいのであります。アインシュ

タインは自分の考へ出した相對性原理が若し正しかつたならば三つの豫言が、現實として證明せられねばならぬと云ひまして、その豫言の中既に證明濟みとなつたものがあつて、どうやら相對性原理は正しいものと認めねばならなく成りました。エールリッヒの化學的療法なるものも、丁度それと同じでありまして、彼は人體に寄生して居る微生物を殺すためには、人體細胞には害が無くつて微生物だけに害がある化學的物質を發見しなければならない、それにはある有毒な物質を基礎として、それをいろ〳〵な他の物質と化合せしめ、適當な構造をもつた化合物を造ればその目的は達する筈であると考へて、かの黴毒の治療藥なるサルヴァルサン、俗に所謂六百六號なるものを作り出したのであります。六百六號は砒素が基礎となつて居て、總て砒素の化合物は體内に寄生する原生動物に有毒でありますが、それと同時に人體の細胞にも有毒ですから原生動物を殺す程度の量を注射すれば人體をも殺すと云ふやうな事になりますから、エールリッヒはその砒素にいろ〳〵な物質をいろ〳〵な風に化合させ、一々動物實驗に依つて、動物體に害を與へないで、動物體内の黴毒病原體を殺すに足る藥劑を六百種以上も造り遂に六百六番目に出來た、砒素とベンゾールの化合物が、自分の欲するところに叶うたので之れをサルヴァルサンと名付け、黴毒治療藥として卓絶した效能を持つものと認められるに至つたのであります。

だからその後の多くの醫學者は結核に就いても同じやうな方法は行はれないものであらうかと、頻りに頭を惱ませて、これが研究に從事しつゝあるのであります。即ち體内の結核菌だけを殺し身體には害のない物質を見付けようと人々は現になほ盛んに苦心して居るのであります。石炭酸

の如きものは試驗管の中では、立派に結核菌を殺します。けれ共石炭酸を人間の身體に注射すると害を與へますから、肺病患者に石炭酸を注射することは出來ません。重金屬のイオンは試驗管内でみごとに結核菌を殺します。けれ共それを人體に注射すると害を與へますから、結核の治療には用ひられないのであります。先年古賀液と稱して、さも結核に特効があるかのやうに吹聽せられた藥劑は、銅の化合物でありまして、發見者たる古賀氏は體内の結核菌を殺して而も人體には害がないものだと說明し、恰度黴毒に對するサルヴァルサンのやうに、結核に對する化學的療法に成功したやうに云つて居りましたが、殘念乍らそれは誤りで中にはその注射に依つて思はしからぬ結果を惹き起した人があつたやうでありました。古賀液のみならず最近此種の結核治療劑が續々發見されたやうに、新聞等に廣告されて居りますけれ共結核の化學的療法なるものは未だ發見されて居らないのであります。將來の事は何ともわかりませぬが、或はこゝによると幾十年かの後には結核の化學的療法も立派に發見されるかも知れませぬが、少く共現に結核に惱みつゝある人は斯樣な空賴みを決して持つてはならないのであります。黴毒に化學的療法が成功したからと云つて、結核に化學的療法が成功すると考へるのは早計と云はねば成りません。同じく黴生物の寄生に依り、同じく慢性の經過を取るものではありますけれど、病原たる黴生物その物の性質は全く違つて居りますし、又人體に寄生して其處に生ずる病竈の形も全く異つて居りますから、果して結核にエールリッヒが望んだやうな化學的療法なることが行はれるものであるか否かさへも、全く豫斷を許さないのであります。現代人が科學に對する過信は多くは

斯くの如き類推から生ずるものが多いのであります。それがためにこんでもないハメに陷ることが屢々あります。素人ばかりでなく醫學者自身もかゝる類推の弊を免れ得ないのであります。

例へば關節の結核の如きものは關節を絶對に安靜ならしめますこと、よく治つて行きます。ですから肺結核の場合にも、患部を絶對安靜にすれば必ず治るものと類推致します。かの窒素療法と稱せらるゝ、人工氣胸療法なるものは窒素を肺と胸壁との間に送つて肺を壓迫し、以つて肺を動かぬやうにする療法でありますが、殘念乍ら肺は動かねば機能を營むことが出來ないのでありますから、その目的を達しないのであります。又かの自然療法乃至サナトリアム療法と稱する結核治療法は矢張りこの原理に從つて肺をなるべく安靜にするために身體をも安靜にせしめ、以て治癒を計らうとするものでありますが、身體を無制限に安靜にする結果は、心臟の機能を衰弱せしめ患者をして時として再度立つ能はざらしめる事があります。これ等はいづれも類推の弊であると思ひます。關節と肺とはその機能も構造も異つて居るものですから同日に論じては成らないのであります。ですから關節を安靜にして關節結核が治ると云つても、それを肺に無條件で應用すると云ふことは間違つて居ると云はなければ成りません。なる程、肺病患者が安靜で治る例は澤山ありませう。けれ共それが關節結核と同じ原理で治つたと判斷するのは間違つて居ると思ひます。この事をよく腹に入れて置きませんと、安靜療法で治らない場合、その安靜療法を恨むやうな心持ちになつて來るのであります。ブレーメル以後、安靜で以つて肺結核の治るといふことは疑ふべからざる眞理のやうに考へられて居り

ますが、それでも尙日本だけで年々十萬人近くの肺結核死亡者を出すこと云ふことは、お互に心を靜めて考へてみなければ成らぬことだと思ひます。骨の結核の如きはレントゲン線に依つてみごとに治ります、けれ共肺結核はレントゲン線に依つては今のところ殘念乍ら治りません。それは不思議でもなんでもなく當然の事だらうと思ひます。だから醫學者なるものは類推といふことはやめて、別の立場から研究の歩を進めて行くのが、賢明な策だと思ひます。其處に醫學の進歩が圖られる譯でありますが、多くの醫學者はこの類推のために禍されて何時迄も同じ所をさまよつて居る譯であります。

いづれにしても、斯うした譯で、醫學的知識は非常に進んでは來ましたけれ共、人間の觀察や實驗は、繰り返して云ふ通り、誤謬が甚だ多いから、醫學的知識に對しては決して依賴しすぎぬやうに注意しなければ成りません。殊に現今の醫學は動物實驗の結果を直に人間に應用しようとするために益々誤謬に陷り易いのであります。醫學は本來人間を對照とするものでありまして、動物實驗はたゞ一の附隨した研究方法に過ぎないのであります。人間を研究の材料とすることは、人道上不可能なことであるために、止むを得ず動物を藉りてその機能を研究し、それに依つて人間の機能を類推するに過ぎません。例へばモルモットの結核を研究して、それを治す藥劑を發見したからと云つて、それを直に人間の結核に應用することは無謀なことゝ云はねば成りません。古賀液の如きは、今から思つてみますと、人間を實驗動物に使つたやうな弊害がなかつたとは云へません。ですから珍しい藥として廣告されてゐる物を用ひる際には、餘程注意をしないと自身

が實驗動物となるやうな悲しいハメに陷ります。その上わざ〳〵高い金を拂つて一種の犧牲になるのですから洵に悲しいことゝ云はねばなりません。而も慢性病者の中には、かゝるハメに陷つてゐる人は決して少くないのであります。

二、醫學と醫術

今の世の中はすべての人が理窟つぽいことを好み、むやみに新らしい知識に憧れる傾向を持つて居ります。換言すれば六ヶ敷い理窟がついて居れば、たとひそれが間違つた知識でも、嬉しがつて我ものとしようとつとめます。たとへばかつて相對性原理が女學生の間に持て囃されたことがありました。世界で十二人しか了解するものがないと、相對性原理の發見者アインシュタインが申しました位六ヶ敷いことであるにも係らず、それが珍しいことである爲に好んで人々によつて研究されようとしたのでありますが、間もなくわからずしまひに、捨てられてしまひました。ですから書物などでも著者は成るべく六ヶ敷い理窟を書かうとする傾向があるのであります。通俗療養書などを繙いてみますと、實にヒチ六ヶ敷議論が並べてあるのが常であります。殊に精神療法とか神秘的療法とかいふ方面の書物を繙いてみますと、必ず新らしい醫學上の學說で說明しようと企てられて居ります。無論それは多くの場合こぢつけに過ぎませんけれども讀む方では、こぢつけでもいゝから並べてないと滿足が出來ないのであります。この點から見ると私のこの書物などは定めし讀者にとつて物足らぬところが多いだらうと思ひますが、私の考へでは多くの慢性病者は理窟のために惑はされて却つて病を長びかせつゝあると云つても差支へないの

でありますから、慢性病治療の第一歩として理窟から離れることいふことを實行すべきであると思ひ、態とありふれた理窟を述べるに過ぎないのであります。實際又六ヶ敷い議論を書くといふことは、たやすい議論を書くより容易なのであります。同じことを六ヶ敷く書くことは出來ても、それをたやすく書くことは、却つて困難なのであります。ですから私はその困難な方を選んだのでして、この點だけは同情して頂かねばなりません。

患者に限らず醫者も又成る可く六ヶ敷い理窟を知ることに心掛けて、却つて病を治す技術の方面には餘り身を入れないのが常であります。茲で云ふ技術の方面とは、手術だとか注射だとかその他手先の仕事を云ふのではありません。もつと廣い意味の技術、即ち如何に患者から病を追ひ出すかといふ術をいふのでありますが、この「術」は今のお醫者さんにはとかく蔑ろにされてゐる傾きがあります。言葉を換へて云ふならば今のお醫者樣は、とかく「醫學」を重んじて「醫術」を重んじないのであります。醫學を重んずるといふことはもとよりよい事でありますが、それと同時に醫術といふことが尙一層尊ばれなくてはなりません。醫學の目的は病を治すことにあるのですから極端に云へば病を治す術さへ知つて居れば醫學などは知らなくても、その人は立派な醫者といふことが出來ます。無論、病を治すためには前にも述べたやうに、病の原因や病の際に於ける人體の變化を研究しなければならぬのでありますが、理窟を知ることに興味を持つ結果は治療に餘り身を入れないのが常であります。從つて今の醫者は病の診斷にのみ浮身を窶して、病の治療には冷淡になり易いのであります。ごこのお醫者樣へ行つても、診斷に一定の時間を費すだけで一たん診斷を下すと

多くの場合無言で處分箋を書いて藥を與へて知らん顔をして居ります。これは總ての病人があたり前の事であると思つて、少しもそれを可笑しいことだとも變だとも思ひません。診斷さへつけて貰へば後は默つて藥を貰つて飲んで居ればよいと信じ切つて居ります。

ところがよく考へてみるに是は頗る間違つたことゝ云はねばなりません。動物の病氣ならば、彼等はこちらからの質問に答へることが出來ないから、その症狀に依つてその病氣を判斷し、それに對する治療を講ずるより他に途はありませんが、人間の病氣はたとひ患者自身が、ある局部の症狀を訴へても、その原因は患者の過去の行爲、既往の生活、その他いろ〳〵の複雜な原因が寄り集つて一つの症狀を現して居るのでありまして、その原因は時として患者自身さへ知らずに居ることがありますから、醫師たるものはよく患者に質問してその原因を明かにし、そうして出來るならばその原因をのぞいて、初めて滿足な治療を施すことが出來るのであります。然るに通常の醫師の遣り方は局部の症狀のみを基としてそれに對する治療を講ずるのでありまから、謂はゞ動物と同じやうに患者を取扱はうとする惧れがあり、從つて病氣ははか〴〵しく治つて行かないのであります。

思ひ切つて云ふならば、醫師がその全人格を持つて治療に從事し、患者の全人格と相融合して病を追ひ出さうと計劃するのでなくては、眞實の治療を施したと云へないのであります。併しこれは所謂理想的なことであつて、醫師にこのやうなことを望むのはむしろ野暮なことゝ云はねば成りません。何となれば、一人の患者に一人の醫師が附き切つてるては到底醫師たるものは生活することが出來ないからであります。ですから自然醫業

は他の職業と同じやうなものとなり、醫師は患者の訴へを聽いて表面に現れてゐる症狀を判斷し、それに依つて治療をなすに過ぎないのであります。是れは止むを得ないことではありますが、併し止むを得ないからと云つて居るだけでは、この醫弊を除くことは出來ません。慢性病が治りにくいのも、主としてこの醫弊が禍をなしつゝあるからであります。それ故慢性病者は醫師に向つて出來るだけ詳しく自分の性格、自分の過去の經歷、自分の心に横つてゐることを打ち開け、そうして醫師に判斷を乞はねばなりません。若し甲の醫師が患者の左樣な訴へを嫌ふやうであれば、須らくかやうな訴へをよく聽いてくれる乙の醫師を尋ねて治療を受くべきであります。

ところが多くの醫師はそのやうな患者のくだ〳〵しい訴へに耳を傾けてゐる暇がありません。もしそのやうな事を訴へる患者があるならばそれは患者の愚痴だと云つて相手になりません。患者の愚痴をふん〳〵聽いてゐては自分の口が乾上ると思つて聽かうと致しません。實際のところ少しばかりの診察料を取つて一人の患者に長く相手になつてゐては商賣は成り立つて行きません。多きな聲では云へませぬが、症狀に對する藥劑を與へていつ迄も患者を通はせて置けば、一刀両斷的に治してやるよりも、遙かに利益になるのであります。と云ふと如何にも醫師は情けないものゝやうに思はれますけれども、これは情けないと譏る方がどちらかと云へばよくないので、假りにさう云ふ人が職業として醫術に從事したならば、情けないと知り乍らも、背に腹はかへられぬ思ひで、その弊害の渦にみす〳〵巻き込まれて行くに違ひありません。醫は仁術だと昔から申して居りまして、人間を病苦から救ふと云ふ立場から云へば仁術に違ひありません。

けれども、このセチ辛い世の中では身を殺して仁を爲す人はまづ〳〵少いこと云はねば成りません。

ですから難治の病に罹つたものは醫師に多くを望んではならないのであります。醫師に多くを望むために、病が治らぬとき、醫師を恨む心が生じて來ます。醫師だとて、大ていの者は、何とかして病氣を治してやりたいと考へて居ります。考へてはゐても上に述べたやうな事情でゆる〳〵理想的な治療に從事してゐることが出來ないのであります。

一方から云へば、又多くの醫師は理窟を重んずる結果、診斷さへつけば病氣は藥で以つて治るものだと考へて居ります。治らなくつてもそれ以上の方法はないから、仕方が無いぢやないかと云ふだけにとゞまります。併し、醫師は仕方が無いと諦めることが出來ても、患者はなか〳〵自分の病氣を奇麗サッパリ諦めることはむつかしいのであります。だから甲の醫師にかゝつて治らない場合は、乙の醫師を訪ねます。甲も乙も要するに同じであるに拘はらず何か別の治療法でもあるかと思つて訪ねるのであります。そうして乙の醫師にかゝつて治らない時は更に丙の醫師にかゝります。それでも治らないと、遂には迷信的な治療法に赴いて、結局は煩悶し、苦惱し、無理な諦め方をするのであります。

治療術はそれ故、學そのものではなくつて一つの藝術であります。小說の書き方を學んでも立派な小說が書けぬと同じく醫學に精通してゐても必ずしも、治療術に秀でゝ居ることは云へないのであります。同じ筆と同じ紙と同じ墨をもつてしても字の上手下手があるやうに、同じ病氣を治療するに當つても、人によつて上手下手があることは云ふ迄もありません。こ

んな話があります。むかし北山某と云ふ醫者がありました。ある時彼は鐵砲の名手なる石田と云ふ患者から呼ばれましたが、診察をしてみると疝氣ですから、三和散を差上げませうと云ひました。すると患者は手を振つて「實はけふまでいくたりかの醫師に診て貰ひましたが、どなたも皆疝氣だといふので、三和散を下さいましたが、この通りまだ治りませんから、三和散ならもう御免を蒙ります」と云ひました。すると醫者はニツコリ笑つて云ひました。「あなたは鐵砲がお上手で弟子にその術を敎へられるといふ事ですが、今のお言葉から察すると定めし鐵砲の理には暗いことでせう」とからかひました。すると患者はムツとした顏をして「ナニ私が鐵砲の理に暗いと仰しやいますか、どう云ふ理由でさう云ふ無禮なことを言ふのですか」とつめ寄りました。醫者はいよ〳〵ニコ〳〵して「さあそこですよ、あなたもあなたの御弟子も、同じ鐵砲と同じ火藥を持つて同じ距離で打たれるのに、あなたのがよく當つて弟子衆のがあたらないのはどう云ふ譯でありませうか。私は鐵砲については毛頭も存じませぬが、ものゝ道理には二つありませんから私の意見を申してみますならば、全くそれは手練と經驗の賜で、その時々の道具と身體のつり合ひとか、又は距離と的の鹽梅とか一すそこに言ひ現はし難い理外の理があるからだと思ひます。醫者の藥でも全くその通りで、同じ病に同じ藥を用ひてもその用ひ方によつて病によく的中することしないことがあります、これで私が敢て三和散を用ふる理由がおわかり下さつたこゝと思ひます」と靜かに患者に語つて聞かせました。すると患者は大いに感じて三和散を服用し四十日の後、長い間の難病も癒ゐて元の健康體にかへることが出來たといふことであります。

北山某のこの言葉は少し極端であるかも知れませんけれど、治療術の奥儀は矢張りこゝに存在するのであります。實際病氣の診斷さへつけばそれに對する治療法はどの醫師でも同じであるに係らず甲の醫師はよく人を治療し、乙の醫師は餘り上手でないといふやうな例は世の中にザラにあるのであります。門前雀羅を張るも門前市をなすも全く術の上手下手であつて、學の淺い深いに關係しないのであります。尤も開業術の巧拙といふこともあるから、よく流行る醫師が必ずしも治療術に秀でゝゐるとは限りませんがよく流行るお醫者さんにかゝれば、一般に治り易いといふ事は事實であります。齒痛に惱む患者が齒科醫の門を叩いてその瞬間に痛みを忘れることがあるやうに、よいお醫者さんに傍に來て貰つたゞけで患者の苦しみが治ることいふやうな現象は至る處に見られるのであります。これは一種の暗示作用でありますが、上手な醫者は畢竟ずるところ患者に治癒の暗示を與へることが上手なためだと云つてもよいのであります。上述の北山某のごときは確かに患者に治癒の暗示を與へることが上手であつたと云ふべきであります。珍らしい藥劑が發見せられて發見の當初非常に偉効を奏するのは矢張り暗示作用を伴ふが爲だと解釋すべきだと思ひます。結核菌を發見したコッホが始めて結核菌のグリセリン・エキス即ちツベルクリンを作つて結核の特殊治療劑だと云つて賣り出した時、それに依つて多くの患者が治ることの出來たのは云ふ迄みなくコッホの名聲の暗示に掛つたものと解釋すべきであります。現今ではもはやツベルクリンは結核治療の方面では捨てゝ顧られないのでありますが、結核患者たるものはツベルクリンの注射を乞ふに先つて、何故ツベルクリンがその發

見の當初に確かに效を奏したかを考へてみる必要があります。そうすれば今は利かぬと稱せらるゝツベルクリンでもみごとに效を奏しないことも限りません。

醫者が學を重んじて術を比較的重んじないといふことは、昔の醫者よりも今の醫者の方が甚だしいやうに思ひますが、昔の醫者でもやはり同じやうな弊害をもつて居たことは瞭かであります。例へば「お醫者樣でも草津の湯でも惚れた病は治りやせぬ」といふ俗諺から考へてみてもそれを察することが出來ます。眞に治療術に長た醫者であるならば惚れた病でもみごとに治し得る筈であります。大古の名醫エラヂストラーツスがシリア王ゼロイクスの王子の難病を診察して王子の病氣が、その繼母を戀慕して居るために煩悶して生じたことを見拔き、王子の病を治すには、繼母と結婚せしむる他に途がないと王に說いてそれを實現せしめた如く、名醫ならば戀の病でも立派に治し得る筈であります。尤もこの諺は戀の病なるものは醫者の藥を與へるだけでは治らぬといふ意味でありますけれ共、一面に前に述べたような弊害を語つてゐるものと見做して差支へありません。フロイドの立てた精神分析學なるものも要するにこれと同じやうな一種の治療術であつてそれが學理に依つて裏付けられてあるに過ぎません。

術を行ふといふことは學理の單なる應用ではなくして、醫者の全人格の活動を俟たねば成りません。然るに前に述べたやうに全人格をもつて活動するといふことは多くは事情が許しませんから今も昔も醫師は只學理の單なる應用を行つてゐるにすぎません。古川柳に「半殺しにして餘人へと籤醫者」「供の醫者盛り殺したに相違なし」とあるごとく醫師が天下御免

の殺人者と考へられて居るのも要するに醫師が全人格を以て活動しないからであります。これは日本ばかりでなく西洋でも同じことであります。されば西洋の診にも「なりたての醫者は患者を殺すが、老巧な醫師は患者を死なせる」などといふ皮肉なのがあり、バラダスは「外科醫ゲンナヂウスは、恰も死刑執行者が、罪人を殺すやうに患者を殺したが、たゞ死刑執行者とちがふ所は、殺し代を取つたことだ」と言ひ、ルシリウムは「外科醫ヘルモゲネスは、ヂューカリオンの洪水よりも餘計の人を殺した」などと書き、また「ヂオフアンツスは、外科醫ヘルモゲネスの夢を見たばかりで死んだ」とまで書いて居ります。醫者を夢に見たゞけでさへ命がなくなるのですから、實際の醫者の恐ろしさ加減がわかります。ニカルクスは「マルクスといふ內科醫がジュースの神の石像に觸れたところ、その石像さへなくなつてしまつた」と書いて居りますが、これなどは、到底川柳子も及ばぬ惡口であります。

ジョセフ・ザバラといふ、猶太の著者が、第十二世紀頃に書いた「喜びの本（ブック・オブ・ヂライツ）」の中にこんな話があります。――――ある哲學者が病氣に罹つたところ、醫師が診察して、どうしても助からぬと言ひました。然し、どうした譯か患者は日ならずして恢復しました。ある日哲學者が病後の散歩を試みて居ると、ふと自分を見放した醫者と途中で出逢ひました。醫者は不審そうな顏をして哲學者に向ひ、「あなたはあの世から來たんですか」と訊くと、哲學者は徐に口を開いて、かう答へました。

「如何にもあの世から來ましたよ、あの世ではお醫者さん達が隨分ひどい目にあひますよ。患者を殺した罪でネ。まあ〳〵そんなに吃驚なさいますなよ。あなたは決してあんな目にあふ氣遣ひはありません。ね？何故

ですつて？それはね、僕が閻魔樣にあなたは醫者ぢやないと告げて置きましたから。」

讀者はこの言葉が如何に皮肉な意味を持つて居るかを諒察されるであらうと思ひます。

かくの如く、醫師が「人殺し」と見らるゝ理由は抑も何處に存在するかといふに「見立て違ひ」卽ち誤診といふこともその理由の一つでありませうが、最も大なる原因は、醫者が單なる「藥劑の取次人」たるところにあると考へます。「鰯の頭も信心から」といふ如く、治ると信じて飲む藥なればこそ病が治るのであつて藥劑そのものには本來、疾病治療作用を持つてゐるものが極めて少いのであります。醫者で且文豪であつた、アメリカのハーヴァト大學教授、オリヴァー・ウエンデル・ホームズが、嘗て學生に講義する際、こんな皮肉を言つたことがあります。「若し凡ての藥劑を海の底に沈めてしまつたならば、海にとつては大へん氣の毒だが人間にとつては、又とない幸福だ。」またある醫者は「丁度、エヂプトのアレキサンドリアの圖書館のやうに、凡ての醫學圖書館を無いものにしたら、人間にとつては誠に好都合だ。」と書きました。

英國の文豪シエクスピーアもマクベスをして「藥は犬にやれ」と言はしめて居る如く、藥そのものには左程の効能がなく、藥が効能をあらはすのは之を與へる醫師の人格と、之を服用する病人の心理の如何によるのであります。スコフィールドは、「治癒すべき疾患ならば、患者の眼と、醫師の眼とが出逢つた瞬間に、治癒が始まる」と言つて居ります如く、疾病を治すものは醫者であつて、藥ではなく、又、その醫者の知識ではなく、寧ろ人格であります

す。ウースターは「醫學と宗教」と題する書物の中に「醫者に成功を齎すものは二つであつて、その一は人格、その二は知識である。ところが現今は、知識のみが尊ばれて、人格が顧みられない」と言つてゐますが、これは現代の醫弊を喝破して餘りある一言であります。なる程見立て違ひを避くるためには知識の卓越した醫者を選ばねばなりますまいが、さて診察が定つたとき、之を治すには、名醫と雖もきまりきつた處方に從ふより外はなく、病が治ると治らぬとは偏に醫師の人格の高下によるのであります。キリストが多くの難病を治し得たのはいふ迄もなくその高潔な人格の力に依つたのであります。

醫聖ヒッポクラテスは、「醫にして哲學者たるものは神に等し」と言ひましたが、こゝでいふ哲學者なる言葉は、無論人格の勝れた人といふ意味を持つて居るのでありまして、つまり孔子の所謂「聖人君子」を指したものであります。

高潔な人格を有する醫師と、その醫師を絶對に信頼する患者とが力を協せて病と鬪ふとき、始めて完全な治癒を望むことが出來るのであります。

新約聖書の馬太傳第十八章十九に「我また爾曹に告ん、もし爾曹のうち二人のもの地に於て心を合せ、何事にても求めば、天にいます吾父は彼等の爲に之を成したまふべし」とは正にこの邊の消息を語つたものと言ひ得ませう。

然し乍ら醫者をして人殺したらしめるのは、患者の方にも責任がないとは言へません。醫者を信用しなければ難しい病氣は治らぬといふことを知つて居り乍ら、その患者も決して醫者を信用しません。尙又學問と技術

こは必ずしも一致してゐないこは知つて居り乍ら肩書に依つて技術の巧拙を判斷しやうこする傾向があります。だから醫者の方でも目的の爲には手段を選ばぬこ云つた風に肩書を得ようこするのであります。最近は博士號を持つてゐる人が無暗に殖ゑて來ましたから段々世間でも昔程信用しなくなつて來ましたけれど、まだ〳〵學位を尊重する弊害がありまして、此書物を買はれた人も多分私が學位を持つてゐる爲にそれにつられて買つてみる氣になられたのではないかこ察します。私が述べるやうなここは常識の發達した人ならば素人でも考へて居るここでありまして、敢て學位を持たなくても言へるここでありますが、矢張り素人の書いたものよりも幾分か注目され易いのは、この間の消息を語るものこ言ふべきであります。だから患者こなつた場合には、よい醫者を選ばなければなりません。

よい醫者を選ぶこ言つて必ずしも近所によい醫者があるこは限りませんから、少くこも人格者を選んで自分の身を任すべきであらうこ思ひます。若し又不幸にして人格者をも得られぬこならば、相當の覺悟を以つて醫者にかゝればよいのであります。貝原益軒は、「病ある時、若し良醫なくば、庸醫の藥を服して身を損なふべからず、たゞ保養をよく愼み、藥を用ひずして病の自ら癒ゆるを待つべし、斯の如くすれば、藥毒に當たらずして早く癒ゆる病多し」こ言つて居りますが、これは今の世の中にも立派に通用するばかりでなく、すべての患者がよく心得て置かねばならぬ訓へであるこ思ひます。實際庸醫にかゝるこきは、病を治してもらふごころか、却つて自分の身を害するに役立つのみであります。慢性病者がいつまでも病を治すここが出來ぬのは、實はこの藥の害毒のためだこ言つても差支へないのであ

ります。古い言葉に「病傷はなほ療すべく、藥傷は最も癒し難し」とありますが、慢性病者の多くは自分の病氣がその實、藥の爲に起る藥傷であることを氣付かないで、いつ迄も病傷であると思つて居ります爲に、相も變らず藥をのんで、益々藥傷を重らしめつゝあるのであります。

實際後にも繰り返し述べるやうに、慢性病なるものは、多くは、故意に捨てゝ置けば治るのであります。構はずにうつちやつて置けば自然に治つて行くものであります。それを患者が早く苦痛から脱れたいとあせつて醫者を訪問したり、藥を浴びるやうにのんだりするので、却つて深みへ入つて行くのであります。現代の醫學はいろ〳〵の病因を明かにすることが出來ましたけれ共、少くとも病をみごとに治すことが出來ねばその病の原因がわかつたとは言へないのに、それをわかつた振りをして、治療しようとするから難治をして遂に不治たらしむるに至るのであります。原因のわからぬ病氣は人力の如何ともすることが出來ないのでありますから、捨てゝ置けばいゝのであります。それを醫者となつた以上は何んとかしなければ濟まぬやうに思つて手を掛け、患者も又何んとかして貰はねばとても辛抱が出來ず、いろ〳〵の治療法を行つて貰ひ、言はゞ患者と醫師とが力を協せて患者を不幸に陷らしめつゝあるのであります。糖尿病の際には身體の糖をこなす力が少くなつて居るからと言つて、所謂含水炭素をなるべく與へないやうにするのでありますが、よく考へてみるにさうした事は一種の小刀細工ではあるまいかと言ふ疑が起つて來ます。人間が生きて行くためには、含水炭素は無くてならぬものであります。それだのに糖をこなす力が無くなつたからと言つて、糖を與へずに置けばその結果は恐ろしい

ものでなくては成りません。糖をこなす力が弱つたならば、一時含水炭素を減じてその力の恢復するのを待つこいふことはなるほど理窟に叶つたことでありますが、いつ迄含水炭素の量を減じてゐても尙且糖をこなす力が、元に戻つて來ないやうな時には、糖の足らん事から起る害が現れて來ることを察するに難くありません。ですからそう言ふ場合に、いつ迄も含水炭素の量を減ずるこいふやうな事は中止するのが適當な處置でないかこ思はれます。治るべき病ならば一定の方法を、一定の時日、講じたならば治つて行くに定つてゐます。だから一定の方法を、一定時間行つて而も依然こして治つて行かなかつたならば、その方法を中止するのが一番賢いやり方だこ思ひます。糖尿病でも慢性胃腸病でも肺結核でも慢性の腎臟病でも一定の期間の後には、それ〴〵含水炭素を控へたり、消化劑をのみ續けたり、安靜をつゞけたり、蛋白質を控へたりすることをやめて、積極的な方法に移るのが至當でないかこ思ひます。神經衰弱の如きものは、その人の性質から起る病氣でありますから、腦を沈靜させるこ言ふやうな見當違ひな考へから、臭劑を長い間のみ續けることは決して感心な方法こは言へません。

要するに良醫がなくば一切醫者に掛らぬのが得策であります。死病は藥を用ひても治らないのだこ言ふことを知つて、なるが儘に任せた方が少く共慢性病に際しては、賢明な態度だこ言ふことが出來ます。急性の病の場合こか或は誰でも完全な治療法を知つて居るやうな病に、醫師にかゝるのは當然のことでありますが、醫師にかゝつてもたやすく治らぬ病氣に罹つた場合には、よく胸に手をあてゝ今私が述べたことを考へて貰ひたいこ思ひます。尤も慢性病の經過の間に、時こして、急性病に襲はれることがあ

りますが、一たん醫者を信じなくなると、さう言ふ病氣にまで、醫者を拒まうとする人がありますが、それは間違つた態度であると言はねば成りません。よく精神療法に心醉する患者がマラリヤの如き病氣迄精神療法に依つて治さうとする態度には、私は贊成しかねるのであります。マラリヤにはキニーネと云ふ特効藥がありますから、それに依つて間違ひなく治る以上、それを無視して精神療法に賴ると言ふことは、愚かなことであると思ひます。醫を信ずる時には、信じすぎ、醫を信じなくなつた時に醫を信じなさ過ぎると言ふことはよくないことであると思ひます。慢性病者の中には、反抗的に言はゞ頑迷と言つてよいやうな態度を執る人がありますが之れも慢性病治療の際には排すべきことであると思ひます。

要するに患者は自分の身を愛しすぎないやうに覺悟して、自分の病に對して冷靜に考へると言ふことが必要だと思ひます。

三、精神と肉體との關係

科學の發達した結果、醫學の方面に動物實驗が應用されるやうになつたことは、既に述べたところでありますが、その結果は病氣とその人の精神との微妙な關係が、比較的閑却されるに至りました。いろいろの身體の機能を研究するに當つて、多くは各器官を體外に取り出してその機能を觀察するのでありますから、成る程その器官の作用は一應それに依つて明かにすることが出來ますけれ共、人間と云ふ統體の中に於けるその器官の機能といふことになつて來ると動物實驗のそれとは餘程趣を異にしてくるのでありますが、例へば、消化液を體外に取り出して肉類なり、穀物なりの消化時間を比較研究して出た結果は、その儘人間には應用されないのであります。

かりに體外へ取出した消化液に依つて、牛肉の方が豚肉よりも消化がよいこと判斷されても、その人が牛肉よりも豚肉を好む際には、その人にとつて豚肉の方が牛肉よりも消化がよいのであります。餅が米よりも消化が惡いこと實驗されても、餅を好む人に取つては、餅は米よりも消化がいゝ譯であります。ところが今の醫者でも又患者でも只書物に書かれてあるところの、人體を離れた實驗の結果のみを知つてゐて、それを標準として物を判斷するためにいざ病氣の治療となると、思はぬ間違ひを來たすのであります。これは今の醫學が患者の精神作用を度外視して居る一例でありまして、慢性病治療の際には殊にこの弊害が目立つのであります。すべての體内の器官の機能は、悉くその人の精神作用の影響を受けてゐるのみならず、多くの病は直接又は間接に患者の精神狀態がその誘因となつてゐると云つて

病氣は気から

も差支へはありません。

今から凡そ四十年ばかり前のことです。ウインの老醫ブロイエルのもとに一人の若い女患者が診察を乞ひに來ました。患者は廿一歳の處女でありましたが、强度のヒステリーのために、口を利くことが出來ず右腕を上げることが出來ず、又不思議なことに水を呑むことが出來ませんでした。彼女は父親と二人きりで棲つてゐましたが、最近父親が病死すると同時に、この病に罹つたといふのであります。

老醫は患者を診て深く同情し、いろ〳〵と手當を試みましたけれ共、最初の間は少しも効果がありませんでした。ところがよく觀察してみますと、患者は何か心に不平を持つてゐると見ゐて、時々ボンヤリした狀態で何やらブツ〳〵呟くのを見付けました。

他の飲み物が何んでも呑めて、水だけ呑めないと言ふのには何か特別な原因があるに違ひなく、口の中でブツ〳〵言ふのも恐らくその原因に關係したことに違ひないと思つて、醫者は彼女に催眠術をかけて幾度かその吃きを繰り返へさしてみると、段々と不平の意味がわかつて來たので尙も患者を導いて到頭その不平を自白せしめたのであります。

それに依りますと、彼女はかつてイギリスの婦人を教師としてゐましたが、その婦人は小犬を非常に可愛がつてゐて、ある日彼女が訊ねると、恰度その時自分の使ふコップで犬に水を呑ませてゐたのであります。彼女は平素教師をも小犬をも好かなかつたので、この有樣を見るなり思はず、「おゝ嫌なこと」と叫ばうとしましたが、無理にその言葉を押へつけたのであります。これだけの事を語つてから彼女は醫師に向つて、「先生、何んとイヤなことでありませんか」と催眠術をかけられ乍ら言ひました。「全くです、ほんたうにイヤな事です」と醫師は深く同情して言ひました。すると、彼女は「先生もさう思つて下さるのですか、あゝ嬉しい」と言ひましたが、催眠術から醒めると、うまさうにコップの水を呑みました。それ以後水の呑めないと言ふことは無くなつたのであります。

尙又、右腕が麻痺して口を利くことが出來なくなつたのは、ある夜彼女が父親を看病しつゝ、醫師の來診を待つてゐると、右の肱を椅子の背に掛けた儘、疲勞のために眠つてしまひました。と、その時彼女は不圖恐ろしい夢を見ました。即ち、一匹の黑い蛇が父親のベットに這入らうとするので右の手を以つてそれを追ひ出さうとしましたが、手が少しも動かないので、不思議に思つて手を見ますと五本の指が皆蛇になつて居ました。驚いて神樣

に祈らうこしましたが、どうしても聲が出ない、やつこ喉から出て來たのは、幼い時にイギリス生れの乳母から敎はつた子守唄の斷片でありました。これが因こなつて發病以來右の腕が利かないこ共に、口が利けなくなり、母國語では話すここが出來ないで、英語で物を考へるやうになつたのであります。

これらのここを知つてブロイエルは彼女に幾度も催眠術をかけ、その當時の事を回想させて、だん〳〵こ患者の心に横つてゐる憂鬱な原因を取り除き、遂に患者を見事に治癒せしめるここが出來たのであります。

かりに今斯う言ふ患者に向つて、臭劑を與へたこしたらどうでありませう。或は又、消化劑を與へてその儘經過を見てゐたらどう云ふここになつたでありませう、恐らくその患者は永久にその苦しみから脫れるここが出來なかつたに違ひありません。この事を聽いたウィン大學の精神病學敎授フロイドは、非常な興味を感じて、研究の結果、所謂「精神分析學」を立てたのであります。以上はホンの一例に過ぎませぬけれども、これに依つて病氣の原因が實に意外なこころにあるここを知るに足るこ思ひます。假に若しこの患者がこの同じ原因に依つて、胃腸の傷害を起したこしたら、通り一ぺんの診察しかしない醫者は胃腸病であるこ判斷するに違ひありません。又、かりに激烈な神經痛こなつて現はれた場合には恐らくアスピリンを飲ませ置くに違ひありません。

斯樣な極端な例でなく共、心配こか、その他精神上の苦痛が食慾の不振を來たしたり、激烈なる頭痛を起したりするここは、よくある例であります。道德上なり或は法律上なりの犯罪を行つた人が、他人に話し得ない苦しみ

の爲に、いろ〳〵の恐ろしい症狀に惱むことは屢々見られるところであります。斯樣な場合、どんないゝ藥を與へたとて、その症狀が去る譯のものではありません。道德上の罪を犯して神經痛に惱んでゐる人は、その罪を他人に告白することに依つて、その神經痛を治すことが出來ます。又いろいろの不安のために慢性病を惹き起してゐる人はその不安を除いてやれば、複雜な症狀もケロリと治つてしまひます。

たとひ、病が最初別の原因で起つたとしても、心配があつたり、苦悶があつたりすると、それに依つて、その病氣を持ち續けて行くやうになるのであります。時として患者は醫師が患者の前で不用意に喋舌つた言葉のために熱を出したり、血を咯いたりすることがあります。この點から言つても精神の興奮しやすい患者は、良醫ならでは招かぬのが得策だと思ひます。

がこのやうな事は今更私の言ふ迄もなく昔の人はよく知つて居りました。「病は氣から」といふ言葉は誰でも口にする言葉でありますが、殘念なことに慢性病者はこの言葉を眞に會得して居ぬ憾みがあります。もとより慢性病のあるものでは、氣を鎭めなければ成らぬと思ひ乍らも、氣を鎭めることの出來ない狀態になつてしまつて居ります。けれ共たとひさう言ふような狀態になつたと言つても、氣を平かにしなければ決して病氣は治らないのでありますから、如何にして氣を平かにするか、と言ふことが慢性病には一番大切な治療法となるのであります。養生訓に「養生の術は先づ心氣を養ふべし、心を和かにし、氣を平かにし、いかりと慾とをおさへ、憂ひ思ひを少くし、心を苦しめず、氣をそこなはず。これ心氣を養ふ要道なり」とあり又「心を靜かにしてさわがしくせず、ゆるやかにして迫まらず、氣を和くして荒

くせず、言葉を少くして聲を高くせず、高く笑はず、常に心を喜ばしめて、みだりに怒らず、悲しみを少くし、かへらざることを悔まず、あやまちあらば一度は、我身を責めて二度悔まず、只天命を安んじて憂へず、これ心氣を養ふ道なり。養生の士斯くの如くなるべし」とありますが、この訓へは、そつくりその儘慢性病治療に應用することが出來るのであります。病を持つ人は、病を持つてゐることを心配します。他人が健康に生きつゝあることを羨やんで少からずいら〳〵します。長く醫藥を服用して居りますと、經濟上の不安を感じます。一定の職業に從事して居るものは、職を失ふことを恐れます。又それが他人に傳染し易い病氣でありますと、人から嫌はれることを氣にします。それと同時に他人が嫌ふことを憤慨します。或は又かりに過去の生活がだらしなかつた時は、少からずそれを後悔します。そうして健康時の嬉しかつたこと、華やかであつたことを思つて憔悴した顔を眺めつゝ、悲しい空想に耽ります。ですから如何に牛乳を飲まうが鷄卵を食べようが、病は少しも治つて行きません。シエクスピーアの「冬の夜ばなし」の第二幕第三場に、リオンチーズをして「子供に似合はぬ立派な氣立だ！母の不品行を聞くと、俄かに悄氣かへつて、ぢつと思ひ込んだ儘で、自分の恥のやうに思つて、元氣も、食慾も、安眠も失くしてしまつて、急に衰弱した云々」とあるごとく、慢性病患者もこの通りに自分で作る心配のために、病を長びかせつゝあるのであります。

ところが前にも申し述べた樣に、慢性病患者は「病は氣から」といふことを知つて居るために、却つて又不安を增すやうなことになるのであります。心配してはならぬ、後悔してはならぬ、憤慨してはならぬと思ひながら、ごう

にもそれを我慢ならぬために、その我慢のならぬことを心配して、いよ〳〵益々病を長びかせて居るのであります。で、繰り返し云ふ通り慢性病患者にはこの心配を取る方法を教へてやれば立所に病を治癒の方向に向はせることが出來るのであります。この不安を除く方法を巧みに患者に教へたならば少く共その醫者は慢性病に對して良醫と言ふことが出來るであらうと思ひます。そうして患者の側から云へば、一日も早くこの不安を取り除く方法を講ずるのが一番得策であると思ひます。それに就いては參考までに後に私自身の意見を述べやうと思ひますが、矢張りこれは患者自身が苦しんだ擧句、悟得したのがその患者にとつて最も有効な方法であると思ひますから靜かに考へをめぐらせて、自分の生れつき、自分の理性と感情の特異性を參酌して、自分獨特の和心術を工夫すべきであります。

物質醫學が隆盛を極めてゐる時代にあたつては、とかく精神醫學は何となく空漠とした頼りないやうなものと思はれ易いのであいまして、「病は氣から」と云ふことを知つて居つても、その「氣」がそんなに酷く具體的の症狀に影響するものだとは考へてゐない人が少くありません。ですから私はこゝに少しく精神作用の肉體に及ぼす具體的事實を指摘して置きたいと思ふのであります。人間はとかく徐々に働らく精神的影響を氣付かずにすごす傾向があるのであります。激しい精神感動の場合に頓死の起ることは、おそらく皆さんも人から傳へ聞き、書物で御覽になつたことゝ思ひます。激しい怒りの場合に、血壓が急に高くなつて、腦溢血などが起るのは眼に立つけれども、少しづゝの怒りに依つて、少しづゝ血壓が高まり、血管に徐々なる變化を與へることには氣が付きにくいのであります。激しい恐

怖の際に一夜で黑い髮の毛が白くなること言ふやうな例は極端であります
けれど、絶ねず苦勞をしてゐる人が、白髮になり易いことは、ザラに見る現象
であります、これは精神作用に依つて、毛髮の榮養が惡くなつたことを證明
して居る實例であります。

これと反對に精神作用は身體に異常な力を與へることも又知つて置く
べきことであると思ひます。「精神一統何事か成らざらん」と云ふ語は甚だ
陳腐ではありますけれど、その實この言葉には慢性病者の救はれる唯一の
途が含まれて居ります。醫師に絶望し、藥劑に絶望し、その他あらゆる治療
法に絶望した時、この言葉程、私達を慰め、私達を病苦から救つて呉れる偉大
な力を持つものはありません。精神作用の慢性病に對する影響を蔑ろに
する者は、やゝもすると精神力の偉大なることをも、氣付かずに居りますが、

精神一到何事か成らざらん

實證を重んずる科學萬能の時代にあつて、それは强ち無理ではないとして
も、科學は人生の全部ではありませんから、人間となつて病の驅逐を心掛け
る人は、私達の身體の裡に隱されてゐる精神力を利用することに躊躇して
は成りません。科學的證明を經ない事項に對しては現代人はとかく疑ひ
を抱き易く、從つて精神力を利用することに逡巡するのが常でありますけ
れど、既に慢性病に對しては、科學を基とした醫術が何の權威をも持つてゐ
ないのでありますから、態と科學的實證を經ぬ精神力を慢性病治療に應用
することは、それがよし不當であるとしても、少くとも一種の應急の試みで
あると言へるだらうと思ひます。全く精神の力と言ふものは科學、少くと
も現代の科學を超越して居ります。かりに實驗室内に於て筋肉を切り出
して、仕事をさせる時、筋肉の疲勞は仕事の量に比例しますけれ共、人間とし

て働く場合に精神の緊張狀態に於て仕事をする場合は疲勞は必ずしも仕事の量に比例しないのであります。精神の集注に依つて、平素は不可能と思はれることでも、容易にこれを行ふことの出來る例は一々擧げる必要のない程皆さんのよく知つて居られることころであるが、治病の際にも所謂一心になつて治病の努力を續けたならば、奇蹟的治癒を得ることは譯のないことだと思ひます。奇蹟と云ふ言葉は不穩當でありますけれ共とても治らぬと思ふ病氣が、精神作用の應用に依つて安々と治ることいふことは、少くとも科學を超越した所謂奇蹟でなくてはなりません。最も最近の醫學はこの精神力に科學的根據を求めやうとして居ります。そうしてたとへば、火急の際に平素持つことの出來ぬやうな重い物を持ちあげることの出來るのは精神作用のために副腎の機能が昂まつて、血液中にアドレナリンが多量に送られ、そのために筋肉が餘計な作用をするのだと言ふやうに說明されて居りますが、もとより斯樣な事は精神作用なるものゝほんの一小部分の具體的現象を說明したものに過ぎないのであつて、現今の科學的知識ではまだ〳〵說明を許さぬ複雜な作用が行はれるものと考へるべきであります。

とかく科學を尊重する氣持ちの人は、科學的證明を經なければ、總ての物を利用する氣にならぬのが常でありまして、精神力を應用するなどゝ言ひますと、どうもそれがアヤフヤな氣がして、藥を呑んだり、電氣を掛けたりするやうな具體的な事と比較して物足らぬやうに思つて眞に精神力に賴ることが出來ないのが常であります。けれども精神作用の偉大なることを科學的に說明することは目下のところ不可能でありますから、科學的說明

の現るゝ時節を待つといふことは、言はゞ永久に好機を失ふことゝ言つてよいのであります。既に慢性病には現代の科學は甚だ權威のないものだとわかつた以上、精神作用の科學的說明を待つてゐるといふことは矛盾したことゝ言はなければなりません。けれども慢性病者に限つて、精神作用に充分な信用を置く人は少いやうに見受けます。健康な時は精神作用の偉大なことを口にして居り乍ら、慢性病にかゝるとそれを疑ふのが常であります。否、寧ろ慢性病者と云ふものはその症候として精神の偉力に疑ひを抱くものといふ定義を下してもよいのであります。だから精神力に心から縋らうと思つた時、慢性病者は治癒の第一歩に踏み入つたものと言つて差支へありません。消極的には、精神を平靜にすること、積極的には精神の偉力を應用すること、慢性病退治の主眼はこの二言に盡きてゐると言つてもよいのであります。

四、疾病恐怖心

精神感動や各種の情緒が、疾病の經過に影響することは前に述べた通りでありまして、心配とか恐怖とかゞ、病氣を長びかせ、或は惡化することは、誰でもよく知つてゐることであります。ところが慢性病者は殊更に激しい疾病恐怖心を持つてゐるのが常であります。それのみならず慢性病者はむしろ疾病恐怖症のために、大部分惱んでゐると云つてもよいのであります。

よく世の中には物をちつとも恐れない人があります。いくら病氣に罹つても何等恐怖心を抱かない人があります。さう言ふ人は慢性病者が恐怖症のために惱んでゐるといふ事を、よく理解することが出來ないのであ

ります。それだからこと言つて慢性病者が疾病恐怖症のために苦しむのを笑ふことは、正當な態度といふことは出來ません。病氣に罹つてちつとも恐怖心に襲はれないやうな人は慢性の病には罹りにくいのであります。疾病恐怖症に惱みやすい體質を持つた人こそ慢性病の犧牲になると云つてよいのでありまして、慢性病に罹つた患者からその病氣に對する恐怖心を完全に取り除くことが出來たならば、最早その慢性病を完全に治すことが出來たと云つても敢て過言ではないのであります。

疾病恐怖は一寸考へてみると、死の恐怖を意味してゐるやうに思はれまして、もとより疾病恐怖の奥には死の恐怖を藏して居りますけれ共、必ずしも疾病恐怖は死の恐怖と同じもので無いのであります。慢性病者の恐怖と言ふものは、多くは理由がないのであります。ですから、いくら理窟を說き聞かせても容易に去つては行かないのであります。はじめは慢性病氣そのものを恐れてゐたのが、後には各症狀を恐れるやうになり遂には恐怖を恐怖するやうになるのであります。病氣を恐怖しては病氣が治らぬと言ひ聞かされて何とかして恐怖しないやうにしたいと思ひ乍ら尙且恐怖せずには居れぬ自分の心を恐怖するといふ有樣が卽ち恐怖を恐怖する狀態なのであります。だから、時として慢性病者に疾病恐怖心を取り除きなさいと忠告することは却つてその病氣を長びかせるに役立つやうな事があります。實際吾々が物を恐れる場合には、多くは理窟がないのであります。蛇が怖かつたり、なめくじが怖かつたりするのは、たゞひそれに理窟をつける人があるとは言へ、その實その理窟は無理に付けたもので、多くの場合なんとなしにたゞ恐いと言ふに過ぎません、だから慢性病の場合にも病

氣を恐れるのは死を恐れるためだ、と言ふ理窟をつけられないことは無いけれど、その實たゞ何んとなしに怖いだけであります。從つていくら理窟で恐怖心を取り除かうとしたとて、取り除けるものではありません。

尙又患者は症狀を恐れて居り乍ら、所謂怖いもの見たさの心理で、色々の症狀を發見して、いよ〳〵益々恐れるといふ謂はゞ恐怖を避けながら恐怖を迎へるといふ矛盾した心理に立ち至つて居ります。結核患者が檢溫せずに居れないのは、熱を恐怖し乍ら、熱を發見して恐怖を迎へるのだと解釋して差支へないと思ひます。糖尿病に罹つた患者は、尿に糖が出やしまいかと、折あるごとに檢糖します。慢性腎臟炎に罹つた患者は、折あるごとに尿に蛋白質が出やしないかと檢査します。そうして大抵の慢性病者は、來る日も〳〵症狀の檢査にかゝり切つてゐて、一刻として心の安まる暇がありません。時には症狀が現れないと何となく物足らぬ感をさへ起します。毎日微熱のある患者は、たまに一日熱が出ないと檢溫が間違つてゐやしなかつたかと念を入れて計りなほします。右と左の腋下で溫度の違つてゐるやうな場合には、高い方の腋下の溫度を以つて眞の溫度と判斷し、喜ぶと言つては語弊があるが、恐怖しつゝも滿足をしてゐるのであります。實際慢性病者は、何か恐怖の種がなくては生きて居れないやうな氣持ちになつて居ります。だからとても恐怖を除けと言つたとて、除かれるものではありません。症狀の檢査をやめよと言つたとて、なか〳〵やめられるものではありません。さうしてしまひには病氣と親しんで病氣の去るのを何んとなく淋しく感ずるやうな氣持ちになつて來ます。慢性病者が後に身體よりも病氣を大事にするやうになるのは、實にこの恐怖心の然らしめると

ころであること言つて差支へありません。

もとより病氣を大事にすること言ふことは、結構なことではあるが、病氣を恐怖しつゝ病氣を大切にすることは、決してよくないことであること思ひます。例へば結核患者が結核菌も一つの生物であるから、彼等に同情して喜んで自分の肺を彼等の生存の爲に提供しようこと言ふのならば甚だ結構であるが、何んこかして一刻も早く追ひ出したいこ思ひ乍ら尙且結核菌をかばふやうな行爲をするのは絶對によくありません。

單に病氣の原因を大切にするばかりでなく慢性病者はその病氣の存在する臟器をも疾病恐怖心のために大切にしすぎる傾向があります。例へば慢性の胃腸病患者は、必ず胃腸を大切にしすぎます。胃や腸は何こかして働きたいこ思つても、その主人公がごし〳〵消化劑を送つて負擔を減じてくれるために、止むを得ずボンヤリこして暮さねば成らなくなります。殊に青年の患者に限つて疾病恐怖心が強いために、藥劑を與ふるなり、或はその他の方法を講ずるなりして、遂に折角の臟器を癈物同樣にして仕舞ひます。この位の理窟は誰にも分ることでありますけれど、實際その病氣に惱んでみること、理窟は理窟こしてよくわかつても、しかも恐怖心が自分の精神全體をめちや〳〵に狂はせてしまふのであります。

斯樣な恐怖心は一種の强迫觀念こ見るべきものでありまして、どんなに壓へやうこ思つても、どうしても壓へられないのが常であります。おさへられぬからこそ强迫觀念こ言ふ名稱が與へられてゐるのでありますが、青年期の患者の多くは、いかにしたらばこの强迫觀念を壓へることが出來る

か、こ言ふことに非常に煩悶し、苦惱します。強ち青年期の患者に限りませんけれ共、斯樣な患者は如何にして强迫觀念を除くかこ言ふことに浮身を窶します。それが爲に醫師を訪ね治療書を讀み、何こかして解決の途はないかこ、あせるのでありますが、解決の途は畢竟自分自身がつけるより外は無いのでありまして、しかも自分自身では何こもはや解決がつけられないのであるから益々心がいら〳〵して、結局はやはり病氣を重らせるに役立つのみであります。

ごの醫師も、ごの治療書も、多くは恐怖心の害毒のみを說いて、それを患者に知らせ以つてその恐怖心を去らせようこしますけれ共、それは寧ろ誤つた方法であるこ言はねば成りません。患者は恐怖心が疾病に惡影響を及ぼすことを百も承知して居ります。承知して居り乍らも、それを取り除くことの出來ぬこころに、慢性病者の苦悶があるのでありますから、疾病恐怖心の害毒を說くことは、治療の際には餘り有効ではありませんが、中には恐怖の害毒を餘りに輕く見積つたり、或は又餘りに重く考へたりする人がないでもありませんから、茲に私は疾病恐怖の害毒についての、私の考へを述べて置きたいこ思ひます。よく結核治療書などに「正しく怖れよ」こいふやうな事が書かれて居りますけれごも、よく考へてみるに、それは甚だむつかしいことであるこ言はねば成りません。物を恐れるのに誤つて恐れてゐる人はありません。恐れるに正しいも正しくないもありません。即ち皆んな正しく恐れてゐるのであります。只その度合が激しいか激しくないかこ言ふだけで、しかもそれは他人から見た時の場合であつて、本人には程度の差別は有り得ないのであります。だから「正しく怖れよ」こ言ふ言葉は

多くの患者にとつて、遵奉しにくいことであります。少し恐れてやめることいふやうなことは、到底出來るものではありません。全く恐怖心が無ければ、結構なことでありますし、恐怖心があれば、病氣にとつて惡影響を及ぼすに違ひありません。病氣を全く恐れない時には、無謀なことをしやすいからと言ふので、「正しく怖れよ」といふ言葉が使用されるのであるかも知れませんけれど、一度恐れを知れば無謀なことをするよりも、むしろ激しい害毒を起すことは慢性病者に常に見られる現象であります。如何に多くの患者が療養書の爲に恐怖心を誘起され、恐ろしい苦境に陷つて居るかは慢性病治療に從事した醫師の總てが經驗してゐることであります。多くの場合病氣に關する知識は疾病恐怖心を增すに役立つのみであります。その時に當つて「正しく怖れよ」と敎へたならば患者は激しい恐怖に陷入るに違ひありません。

併し一たん恐怖に陷つた以上は、前述べたやうな理由で、その恐怖から脫することが出來にくいものであるから、斯樣な人に向つては私は寧ろ恐怖の害を說くよりも、恐怖の左程害のないことを知らせたいと思ひます。恐怖の害を說き乍ら、恐怖の害のないことを說くことはいかにも矛盾したことでありますけれ共、理由のない恐怖に陷つてゐる人、所謂激しい强迫觀念に惱まされてゐる人には寧ろもつと恐れよと忠告したいのであります。即ち私は徹底的に恐怖することをすゝめるのであります。强迫觀念で起る恐怖の如きものは、それ程にも害がないのであります。たとひ害があつたとしてもその害を徹底的に受けなければ、その害から脫れることが出來ないのであります。が、幸にして徹底的に恐怖してもそれ程の害を受けませ

ぬから、强迫觀念を持つて惱んで居る人は須らく恐怖を迎へるべきである
こ思ひます。

一方に於てさのみ恐怖を感じないか又は恐怖を恐怖する程度に至らず、只一種の囚れた觀念に依つて疾病恐怖に基く行爲をなしつゝある人には私は恐怖の害を說くのであります。しかも慢性病者の多くは、この後者の部類に屬して居るのですから茲に疾病恐怖の害を說明して置かうこ思ひます。

疾病恐怖が身體に及ぼす影響の中最も甚しいものは、食慾の減退であります。身體に熱感を感じても何等食慾に影響のなかつた人が檢溫器を使用して三十七度五分前後の目盛りを讀んだ時、食慾は急に減退します。又今迄痰を吐き乍ら左程食慾に影響しながつた人が、痰の中に蜘蛛の巢のやうな血線を發見した時、急に耳がジーンこし目がボッこして食慾が減じます。慢性腎臟病患者が尿を酸性にして火に掛けた時、濁りが生ずるこ一種の悪寒を感じて、物を食ふ氣の無くなるここもよくある現象であります。食慾が減退すれば自然に榮養が悪くなるここは言ふ迄もありませんが、この食慾の減退するこいふここは、言ふ迄もなく消化器の局所の變化ではなくして中心性卽ち中樞神經の影響に依るものでありまして、中樞神經に與へられた影響は消化器ばかりでなく全身の器官に影響し、すべての器官の機能を鈍らせるものであります。謂はゞ疾病恐怖は全身の活力を減ずるこ言つて差支へありません。だから益々病氣は長びく譯であります。

第二には自然治癒力に對する影響であります。これはもこより身體の活力の一種こ見做すべきものでありますが、慢性病者はこの自然治癒力を

應用して病の退治を計るより外に途はありませんから、特に項を別けて注意を促した譯であります。自然治癒の力が、中樞神經の司ごる處であるか、或は中樞神經と連絡なくして各細胞が特別に持つてゐるかは容易に判斷することは出來ませんけれ共、細胞の機能がある程度まで神經系統の支配を受けてゐるところを見ると、疾病恐怖に依つて自然治癒力が阻止せられると考へても差支へないと思ふのであります。

かう云ふ譯で疾病恐怖心は慢性病に必ずついて廻りさうして慢性病をして、益々長びかしめるものでありますから患者たるものは恐怖心に對する覺悟を定めて適當な生活方法を講じなければなりません。

殘念乍ら疾病恐怖心の處置は今の物質醫學ではごうにも仕樣がないのであります。今後心理學が科學的に深く研究され、充分發達した場合には或は適當な、恐怖除去法が發見せられるかも知れませんけれ共、今のところでは私達はたゞ長い間人間が經驗して來た方法を以つて、所謂徐々に心の修養をつんで自發的にこうした恐怖症に對する處置を講ずべきであらうと思ひます。

この事から考へてみましても、現代の醫學は慢性病に對して甚だ權威の乏しいものでありますから、所謂非醫者とかまたはかの迷信的療法がこゝにつけ込んで蔓こらうとしてゐるのであります。如何に科學が發達しても迷信は無くならぬやうに、如何に醫學が發達しても、迷信的治療法は無くなりません。それといふのも、皆この恐怖心の科學的除去が困難なる爲でありまして、殘念な事ではありますけれど又止むを得ない現象といはねばなりません。

第三章　慢性病とは何ぞ

一、慢性病の意義

慢性病とはどんなものかと言はれると、ちよつと、その返答に困ります。もと〳〵急性病に對して名づけられた病でありまして、長い徐々の經過を取る病氣を言ふのでありますけれど、五年も六年も病に苦しんで來た人が、一朝にして何かの動機で治ると言ふやうな例は稀ではありませんから、同じ慢性病と稱せられるるのでも、必ずしも長い經過をとるものとは限つて居りません。してみると病氣の經過時間に依つて慢性病を定義するのは、當を得て居りません。尙又慢性の病が何かの動機で突然急性になる場合があります。してみると必ずしも病の性質に依つて慢性病を定義するのも當を得て居りません。

ところが慢性病と言へば、醫者も患者もすぐ「あゝあれか」と言ふ程よく知つて居ります。だから慢性病を、今更病の經過とか病因の如何に依つて定義することは餘計なことであります。それこそたゞ「慢然」と解釋して置いた方が適當でありまして、私の考へでは慢性病なるものは「得態」の知れぬ病と言つた方が一番よく當つてゐるのではないかと思ひます。きのふ迄少しも寢床の上から動くことの出來なかつた患者が、今日から突然平氣で歩き出すといふやうなことがあります。又醫者が「もうこれも駄目だ」と宣言した患者が見事に助かつて丈夫さうに生きて行く例があります。しかもそれは決して稀に見る現象ではありません。そうした場合よく奇蹟とか、不思議とかいふ言葉が使はれて居りますけれど、慢性病を徐々に經

過するものと定義する人にとつては、或は不思議であるかも知れませんけれ共、何かの機會で突然治ることの出來るものであると言ふ風に解釋するならば、決して不思議でも何でもなく、又私の考へに依れば、得態の知れぬ事こそ、慢性病の正體だと言ひ得るのであります。

時には急性の病から慢性に移ることがありますが、慢性に移つた場合それが急性病の延長であると考へることは、當を得て居りません。たとへば急性腎臓炎からよく慢性腎臓炎を起す人がありますが、その慢性腎臓炎を直ちに急性腎臓炎の續きであると解釋するのは當を得てゐないだらうと思ひます。又急性の胃腸病から慢性の不消化乃至下痢を起す場合がありますが、それを急性胃腸病の延長であると思ふのは誤つて居るのであります。けれ共急性の病を種にして慢性の病を拵らへ上げることは容易に出來ると思ひます。その意味に於て慢性病を急性病の延長と考へることは差支へありませんが、それだからと言つて慢性病の治療を急性病の治療と同じにするのは良くないと思ひます。例へば急性腎臓炎の場合には、食物として成べく蛋白質を與へないようにし、食鹽を減じますけれども、慢性腎臓炎に同樣の處置を講ずるのは考へるべき問題であらうと思ひます。

之に反して、多くの場合慢性病なるものは、患者自身の知らない裡に、極めて徐々に起つて來るものであります。そうして何かの機會に病氣だと自覺したが最後所謂病的意識によつて本當の病人になり切つてしまふのでありまして、それからは患者自身が所謂病を增惡させ長びかしめるのが常であります。

そこで一體慢性病なるものが、どうして起るかと申しますと、すべて病氣

なるものは皆さんも御承知の如く、外因と内因とが相寄つて生ずるものでありまして、内因とは患者自身の體質、外因とは現代醫學の明かにした各種の病源がそれでありますが、慢性病の多くは外因の力は甚だ少く内因の影響が甚だ多いと言はねば成りません。慢性病はたとひその病氣が一局部に存在してゐても、その實その人の全體の病氣と考へた方が至當でありまして、言はば慢性病なるものは俗に言ふ「自分の持つて出た病」であります。換言すれば外から來た病でなくつて、自分が生み出した病であります。この事が多くの慢性病者に理解されてゐない爲に慢性病者は醫師又は藥劑の力に依つて病氣を除いて貰はうとあせり、その結果目的を達せずして悲觀に陷るのが常であります。自分が持つて出た病でありますからして自分が始未してこれを除くより他に途はありません。もし醫師とか藥劑に縋るならばそれはたゞ自分で自分の病氣を除く手助けと見做すだけに止めねばなりません。

然らばどうして自分で病を持ち出すかと言ふに、これにはいろ〳〵の複雜な原因があるのであります。それは個人々々の所謂個性に依つて皆違ふのでありますが、要するに生活とか境遇とかゞいつの間にかその人の全體に一種の變調を來たさせたのであります。と言へば生活を變へ、境遇を變へたならば慢性病が治るかと云ふに必ずしもさうとは限りません。慢性病に罹る人は多くは一種の因はれた主觀を持つてゐるのでありまして、その主觀を變更し所謂人格を改造しなければ病は治らないのであります。慢性病者はよく自分の身體から病だけを驅逐しようと試みますが、それは甚だ覺束ないことゝ言はねばなりません。慢性病者が病を追ひ出さうと

企てるだけでは到底病は追ひ出せないのであります。人間そのものを改造してはじめて病を驅逐することが出來又それより他に慢性病の治療法はないのでありますから、病だけをめあてに養生して居る人は、一日も早くその誤つた觀念を除去しなければなりません。

慢性病者の人格が何故に健康者のそれと違つて居るかと言ふことは、容易に說明することが出來ないのであります。人格が變つて居ればこそ慢性病を喚び起すのだとも言へますし、慢性病を喚び起した爲に人格が變つて行つたとも言ふことが出來ます。實際慢性病に於ては原因が結果となり結果が原因となることはたへず見られることでありまして、多くの場合判然たる區劃なく言はゞずる〳〵べつたりに病氣に罹るのであります。

しかも一たん病氣に罹つた上は誤つた主觀はいよ〳〵その勢を强くし益々病氣を重らせて所謂病を膏肓に入らしめるものであります。卽ち病を恐怖し、病を心配し、一刻も早く苦痛を脫れたいとあせり、無暗に醫藥を取つて益々器官の機能を衰弱せしめ、遂にはどうにもならぬハメに陷つて、後には生きることにさへ苦痛を感じて來ます。精神は常に憂鬱であつて、何を見ても何を聞いても樂しむことがなく、所謂見れども見ず、聞けども聞かず、喰へどもその味を知らず、眠りは奪はれ、根氣は減じ、いろ〳〵の不愉快な病狀のみが起つて、所謂病の問屋となるのであります。だから慢性病者の多くは、たとひ病名は違つてゐてもその訴へる惱みは殆ど皆一致してゐると言つていゝのであります。所謂神經衰弱なるものは、この慢性病にも合併してゐるのであります。肺病患者にしろ胃腸病患者にしろ糖尿病患者にしろ、慢性婦人病患者にしろ、程度の差こそあれ、いづれも神經衰弱症を

持つて居ります。この神經衰弱なるものは後にも述べるやうに、實は捕まへ所のないものであります。あらゆる機能を邪魔し、あらゆる苦痛を惹き起し、あらゆる症狀を誘發するに關與して居るのでありまして、つまるところは患者自身の人格なり主觀なりが捕促し得ないが爲であります。

主觀が囚はれてゐる以上、ものを正確に判斷する力がなくなつて居ります。神經衰弱者の多くは記憶の減退と、判斷力の鈍麻を訴へて居りますがそれにも係らず書物などを讀んで自分勝手な判斷を下し益々恐怖しようとして居ります。判斷力が鈍つたと言ひ乍ら書物を讀む時だけは判斷力が鈍つたとは思ひません。而もその實確かに讀んだことを誤つて判斷して居ります。だから神經衰弱者が讀書する程危險なことはありません、況んや療養書を讀んで、それに依つて病を治さうと言ふことは危險極まることゝ言ふべきであります。慢性病者が讀書に依つて害せられつゝあることは既に述べたところでありますが、要するにその誤まつた主觀に依つて書いてあることに誤つた判斷を下すからであります。書物に書かれてあることをすべて自分の勝手な解釋によつて鵜呑みにしようとする爲に結局は自分の病を重らせるに過ぎません。慢性病者程自分の主觀で病を多く拵らへるものはありません。いろ〳〵の病氣の症候を讀むとどれも皆それを自分が持つてゐるように感じます。ジエロムの小說「短艇の中の三人」の中に、疾病辭典を繰り一つ殘らず自分がそれ等の病氣に罹つてゐることを知る人間が書かれてありますが、慢性病者は自分の持つて居る病氣だけで物足らずに何でもかでも病氣を引き受けてみたいと思ふかのやうな態度を執るのが普通であります。私は前に慢性病なるものは、患者が自分

で持つて出る病だと言ひましたが、こゝに至つて、慢性病なるものは、患者が自分で勝手に作り出す病であると言つても差支へありません。有から無を生ずと言ふ禪家の言葉は慢性病者に常に見らるゝ現象を指摘したものであると言つてもよろしいと思ひます。

實際慢性の多くは患者の主觀の拵らへた物と言つても差支へありません。患者の觀念によつて、作り出された病氣なのであります。だから言葉をかへて言ふならば多くの慢性病者は自分の作つた偶像に惱まされてゐるのであります。言はゞ「空」に惱まされて居ると言つて差支へありません。かう言ふ言葉は少くとも今の醫學者の用ひないところでありますがその實空なものを具體的な方法で追ひ出さうとするところに現代の慢性病治療の缺陷が存在するのであります。觀念で生じた病は觀念を以つて治せばよろしい。だから一たん主觀が改造された場合には、あらゆる症狀は旭に解ける霜のように、とけてしまひます。藥もいらなければ醫者もいりません。たゞ單にかうと觀念するだけで病氣はみごとに退治出來るのであります。醫藥に依つて難治と稱せられてゐる慢性病はこの點に於て最も治し易い性質を持つてゐるのであります。

最も醫者なりその他の治療家なりが、この點に注意をして患者の主觀の改造に導いたならば慢性病の治療は立派に醫者の手によつて遂げられる譯でありまして、たゞ物質醫學に囚はれてゐる現代の醫者は、なるべく具體的な方法で追ひ出さうとするから慢性病を扱ひかねるに過ぎないのであります。

かく言ふと主觀によつていろ〳〵の病を拵へることが果して可能であ

るかを疑ふ人があるかも知れません。現に胃なり腸なりその他の器管なりがいたんでゐるのでありますから、それが單なる觀念の所產であるこ考へにくいこ思ふのは無理はありません。けれ共皆さんも既に御承知でありませうが、催眠術をかけて冷めたい火箸を燒火箸だこ欺いて握らせるこ立派に火傷の水泡を生ずる一例を擧ぐればこの間の消息を充分理解して下さるここが出來るであらうこ思ひます。實際慢性胃腸病者の多くは、いつの間にか自分の胃は弱いもの自分の腸は働きが鈍いものこ言ふ觀念を形成して居ります。だからその人の胃や腸は決して强くなりません、決して働かうこは致しません。如何に胃腸藥を飲んだこころが患者が胃腸の弱いここを信じ切つてゐる場合には、藥は素通りするか又は益々胃腸を弱くするに役立つものであります。だから胃腸患者は少くこも自分の胃腸が決して弱いまゝにこゞまるものではない必ず健康に回復し得るこ言ふ觀念を得なければ成りません。

しかるに多くの患者はこても健康には成り得ないこ諦めて居ります。健康になりたいこ言ふ心があり乍ら、一方に於て健康にならせないこする力が働いて居ります。これではいつ迄過ぎても慢性病の治癒する時節はありません。

病が內臟の奧の方に存在して居りますこ、そんなこころへ主觀が果して及ぶだらうかこ疑ふ人が少くないだらうこ思ひます。けれども最近の交感神經こ精神作用の關係についての研究は實驗的に立派にそれを證明して居ります。私達の內臟はすべて交感神經こ副交感神經こに支配されて居るのでありまして、その交感神經が精神作用に依つて非常な影響を蒙る

こゝは實驗に依つて證明されたこゝろでありまして、若しこの點に疑ひを抱かるゝ人があるならばよろしく生理學書を繙いて御覽になるこよいこ思ひます。喘息だこか胃痙攣だこか消化不良だこか、生殖器の衰弱だこか、心悸亢進だこかは皆んな内臓神經の緊張度の異狀から起るこ言つてよいのでありまして、その異狀は要するに患者の觀念の支配の如何に基いてゐるのであります。

併し乍ら患者こ雖も何もすき好んでさう言ふ觀念を持つ譯のものではありません。出來るならば偏つた主觀は改造したいこ思ふのでありますが、只如何こもするここ出來ずにそうなつて行くここは一面同情しなければ成らぬここであります。こゝに於て所謂患者の個性の問題が起つて參ります。即ち慢性病者が囚はれた主觀になるのは患者にさう云ふ素質があるからだこ言つて差支へありません。人各々その顏の違つてゐるやうに、その身體の中にある各臓器の發育の程度が先天的に異つて居ります。殊に最近内分泌腺の研究が發達するにつれて、人間の個性がそれぞれ違ふのは、その内分泌腺の發達の如何が重大な關係を持つてゐるこいふここが分りまして個性を改造するには内分泌腺を適當に處置すればよいこいふやうな事まで言はれて居ります。だから、一面から言へば囚はれた主觀になるには、その人の先天的の素質が然らしめたので、何もその人自身に罪がある譯でないこ言へば言ひ得るのであります。けれ共それだからこ言つてごうにも手のつけようが無いこ言ひ切つてしまへば、慢性病者は全く立つ瀬がありません。内分泌腺の發達の如何によつて人格の改造が出來るものなら多くの慢性病者は敢て喜んで手術なり、或はその他の處置を受け

るに違ひありません。

残念乍ら内分泌腺の研究はまだその中途にありますから、今日のこころこの方面から人格の改造を企てることは尙早の感がありますが私自身の考へから言へば、内分泌腺こ雖も身體の臟器の一つでありますから、やはり精神の影響を受けるに違ひなく、從つてある程度まで精神の力に依つて内分泌腺の機能をも左右することが出來るに違ひないこ思ひます。だから現今のこころでは精神作用に依つて精神の方向を轉換するより途はないこ思ふのであります。残念乍ら私達はこの世に早く生れすぎました。もう少し年代を經てから生れたならばかうした苦勞をせずにすんだかも知れませぬが、こもかく現代の所謂科學的の治療法では慢性病は治らず尙又人間の主觀を變革することが出來にくいのでありますから各人の心に依つて、各人の心を轉換し、もつて慢性病の治療を圖るより他に途はないのであります。

もこより慢性病治療の方法はいろ〳〵工夫され、手術なり藥劑なりその他種々雜多な療法が推奬せられて居りますから、それらの療法を試みることは一向差支へないけれ共、要することころ病氣の原因が自己自身にあるのであるから、この主眼點を忘れてはならないのであります。自己の心機を轉換し、自己の人格を改造するに役立つ方法ならば、それが醫藥であらうこ、手術であらうこ、信仰であらうこその他何んであらうこ行つて差支へありませんが、その考へ方を逆にして醫藥に依つて治らうこか、手術によつて治らうこか、信仰によつて治らうこか、つまりそれらのものに頼るのは間違つて居るこ思ひます。たゞそれ等のものを利用し、取捨して自己の改善に努

力したならば慢性病はみごとに治つて行くのであります。

かう言ふ譯で慢性病なるものは、要するに患者自身がある一定の動機をまつて作り出した病氣と解釋することが出來ますから、患者は何よりも先きに自己そのものをめざして治療の對象としなければ成りません。病氣はいろ〳〵に別れて居ても、それはたゞその現れ方が違ふものと解釋して自己改善に努力しなければ成りません。もとよりその發生には特殊な原因があるでありませう。だからその特殊の原因を發見して、それを繰り返へさないことも一つの治療法でありますが、一たん慢性病に罹つたならば原因の穿鑿などは第二の問題として只管に自己の心の改良に精進すべきだらうと思ひます。慢性病といふ名稱に囚はれて病氣が長びくものと思ひ込むのは間違つて居ります。主觀の改良は時として短日月に行ひ得る場合がありますから、慢性病は決して慢性ではありません。たゞどこまでも慢性に經過せしむるか、或はそれをみごとに喰ひとめるかは、その人の努力次第であると思ひます。

二、慢性病者の心

慢性病が患者自身の主觀によつて培はれて居るものであることは既に述べた通りでありますが、實際慢性病者は何事でも作つて苦勞する傾向を持つてゐるのであります。即ち健康者には何でもない事が、慢性病者にとつては甚しい惱みの種となるのであります。即ち同じ苦勞の種でも慢性病者の心に宿ると慢性病者の觀念によつて廓大され、膨張させられるのが常であります。殊に慢性病者は過ぎ去つた事情に對して、いつ迄も未練を持ち、後悔を持ちます。さうしてその事情が現在迄續いて居る時、いよ〳〵

益々それを心配し苦勞します。たとへば僅かな症狀にも甚しい恐怖を感ずることがあります。不眠とか、夢精とかは極端なものでない限り左程身體に影響のないものでありますのに、それを非常に心配し苦悶します。尙又脈搏が少し多いと、限りない恐怖を感じます。これ等の症狀は病氣の經過と何等關係もないのに拘らず、それを激しく心配するのであります。實際慢性病者の多くは症狀そのものには害を受けないで症狀に對する心配に依つて害を受けつゝあるのであります。もつとも、多くの治療書には不眠はよくない、夢精はよくない、脈搏の頻數はよくないと書かれてありますが、そのよくない程度がどれ程のものであるかを考へないで、無暗に惡いことだと思つて心配するのであります。眠たくなければ眠らなくつてもよろしい、時節が來れば自然に眠れる筈です。それを規則正しく眠らうとする爲に煩悶が生じ、却つて、益々精神を興奮せしめ、眠ることが出來ないのであります。脈搏の頻數などは人によつて先天的に多いのもありますから、百を越さうが百二十にならうが、何ともないのであります。ところが療養書には人間の平脈が七十二とか何とか書いてあります爲に、その數を越す度ごとに少からぬ恐怖を覺ゑます。尙又たとへば結核患者は二三日下痢が續くと腸結核ではないかと案じ出します。少し腹が痛いと結核性の腹膜炎ではないかと案じます。

このやうに慢性病患者はいはゞ求めて苦勞してゐるのでありますからその主觀を變更しさへすれば總ての症狀を後には餘り氣付かなくなり、從つて症狀の起らぬやうにすることが出來ます。

もつとも慢性病者が苦しむのは書物なり或は醫者の言葉なり或は教育

者の言葉なりが、その理由となつて居ることをも認めなければ成りません。たとへば青年時代にもつとも多いオナニー（性的自慰）の如きは、その害が常に誇張して說かれて居ります。だから神經衰弱の患者などはそれを大へん氣にして居ります。而も害ありと知つて居り乍らやめることが出來ぬために、いよ〳〵益々心配して病氣を重らせつゝあります。ある統計によりますと、神經衰弱者の三百三十三人中百二十三人は過勞とオナニーがその原因であると言ひ、フロイドやクラフト・エービングなどは神經衰弱の眞因はオナニーにありとさへ斷言してゐる程でありますから、私は特にオナニーがそれ程害のないものだと言ふことを述べて置きたいと思ふのであります。

オナニーを最初に科學的に研究したチッソーは、これをもつて罪惡中の罪惡と見做し、すべての人間の惱みはこれから生ずるのだとまで言ひました爲に、從來その害が誇張せられて傳へられ、この習慣に染んだものはいづれも激しい自責の念に責められて居ります。實際オナニーの習慣のもつとも著しい中學時代の生徒に向つて、オナニーは、それ程害がないものだと言はふものなら、それこそ由々しい結果を起すにきまつて居りますから、教育者達はその害毒を誇張して、か樣な習慣を罪惡視させやうとするのが普通であります。これは洵に止むを得ない事だと言へばいひ得るのでありますけれ共、この誇張された有害說が本人に與へる影響は、豫想外に大きなものでありまして、神經衰弱者の大部分は見やうに依つてはオナニー有害說の犧牲になつてゐると云つても差支へありません。

肺病患者の如きは、しば〳〵神經衰弱を伴つて居りますが、このオナニー

の問題に惱んでゐる人が可なりに多いやうであります。何んとかしてこの惡習慣を取り除かうとしても、取り除くことが出來ず、而もオナニーを行つては、肺病を益々惡くするだらうと考へて、いよ〳〵苦悶し煩悶して居ります。かういふ苦惱の訴へをもつて私に相談を求める人が澤山ありましたが、その都度私は、オナニーは決して身體に害をするものではない、その習慣を取り除かうとあせるよりも無關心にしてゐた方が却つてその習慣を脱する有効な方法であると返答しました。これは考へやうに依つては、可なり無謀な亂暴な返答であるかも知れませんけれ共、其害を說いて止めさせるといふやうなことは絶對に不可能でありますから、これより他にこの惡習慣に處する方法はないと思ふのであります。害があることは患者が百も知つて居ります。害があると知り乍ら止めることの出來ぬところに煩悶の種があるのですから、害がないと言ふことをよく本人の頭に浸み込ませるのが得策であるだらうと思ふのであります。

もつとも害があるのに拘はらず、たゞ方便として害がないと言ふのではいけないかも知れませぬけれど、實はオナニーの害は從來たゞ慢然として指摘されてゐるだけで、その實神經衰弱者が恐れる程害はないのであります。だから私はこゝに少しくオナニーの無害のことを述べて置きたいと思ひます。

抑も自ら淫する性質卽ちオートエロチズムは人類にそなはつてゐる一つの本能であります。私達は食物を取る本能を持つてゐると同じやうに、このオートエロチズムの本能を持つて居ります。換言すれば人間である以上、これの無いものはありません。實際青年時代にオナニーを行はなか

つた人は恐らくないだらうと言つてもよいと思ひます。世に食物を喰ひすぎるなと戒める人はあつても食物を食ふなと戒めるものがないやうに、オートエロチズムたるオナニーに對してこれを行ふなと戒めるのは理に悖るのでありまして唯過度に行ふなと戒めて初めて意味があるのであります。

實際オナニーはいはゞ人間にとつて不自然な現象ではなく、ある程度迄は生理的な必然な現象なのであります。いかにもオナニーは一寸考へれば不自然な現象に違ひありませんが、ごく迄もこれを不自然だと主張するのは人間がものを喰べることを不自然だと言ふのと同じく不合理なことゝ言はねばなりません。メッチニコフも生殖器官が成熟しない先に性的感覺が發達することは人類にそなはつてゐる一つの素質であると說いて居りまして、オナニーを以つて一種の道德的犯罪だと見做すことは決して當を得て居りません。動物界を眺めてみましても、このオートエロチズムの現象は到るところに見られるのでありまして、換言すれば生物に共通な現象に外ならないのであります。

オナニーはそれ故男子に限らず女子にも普通見らるゝ現象であります。女の人はこのやうなことを隱すやうにして居りますから一寸想像がつきにくいですけれど、實際は豫想以上に多いのであります。殊にヒステリーの如きはこのオナニーに關する苦悶が、その原因となる場合が少くないのでありますから、女子のヒステリーを論ずる場合にはこの點を見逃してはならないのであります。

このやうに成人男女の殆ど悉くがオナニーを行つてゐるにも拘はらず、

必ずしも總ての人がヒステリーや神經衰弱に罹らないのはオナニーがそれ程人間に害をしないものであると言ふことがわかります。たゞ自責の念が強くて心配しないで居られない人のみが、神經衰弱に罹つたり又はヒステリーに苦しんだりするのであります。

ですから今日の醫學の教へるところではオナニーなるものは、それが適度であるならば決してその個人の健康には害がないと言ふ意見に一致して居るのであります。たゞ前に述べましたやうに、食物も適度であるならば害がなく、過度の時はじめて害があるとひとしく、オナニーも又これを過度に行つた場合害を生ずると說くのであります。もつともその程度が適度で、その程度が過度であるかといふことは決して一概には申せません。ブロッホの書いてゐる例の如きは、四十歳の文學者で、五歳からこの習慣に染み、甚しい時には一日に數回に達したに係らず、その體格が偉大であつて、立派に精神的の仕事に從事することが出來たといふことです。それ故その人の體質次第で、一寸考へると過度だと思はれる場合でも、何の影響も無いのであります。而も害があると言ふ概念に囚れて、それ程でない習慣を、激しく恐怖するのが神經衰弱者の常であります。殊にかうしたことは普通の事と違つて、誰にでも尋ねて見ると言ふ譯にいかぬものでありますから、患者は自分だけがこんなにしばゝ〳〵この惡習慣を行つて居るのであらうと想像し、その結果極端な恐怖に陷るのが常であります。

この嘆はしい現象を見て、ある學者達はオナニーが神經系に與へる影響は自然の性的接觸が與へる影響よりも少いことさへ極論して居るのであります。尤もこれには反對說が多いのですけれど、こにかく從來はオナニー

の害毒が誇張して傳つてゐましたから、この際寧ろ極端な說を立てゝ迷妄を打破した方が世の多くの人を救ふ道となる譯であります。但、過度のオナニーが、ある一部の人にどんな影響を與へるかと言ふことは知つて置いても惡くはありません。過度のオナニーが肉體に及ぼす影響の內、その著しいものは、眼の調節が弱ること、結膜が充血すること、心臟や血管が障害を受け、脈搏が不整になること、それから一番多いのは生殖器の障害、就中夢精であります。こんなことを述べると、皆さんの中にはたま〳〵結膜の充血が起つた時など、それを直ぐ自分のオナニーの習慣のためだらうと解釋して恐怖したり、心配したりする人が無いとは限りません。私が何氣なく書いてゐることが一部の人には甚しい恐怖の種とならんにも限りません。ですから、特に注意をして置きますが、上に述べたやうなオナニーの害毒はたゞ過度の時のみに起るものでありません。而も過度といふ言葉は、單に比較的のものでありまして、實際には、過度のオナニーを行つてゐる人といふものは減多にないのであります。

要するに從來甚しい害毒があると考へられてゐたオナニーなるものは神經衰弱者が考へてゐる程害がないのであります。だから、たま〳〵さう言ふ惡習慣を持つてゐる人は、それを除かうと苦勞する前に、それが決して病氣には惡い影響を與へるものでないと言ふことを知ればよいのであります。

オナニーに限らず、夢精の如きも、可なりに慢性病者に依つて恐怖されて居ります。どうしたならば夢精を治すことが出來るかと、いろ〳〵の藥劑を飲まうとするのでありますが、夢精を治す藥といふがある譯のものでは

ありません。そんな藥を求めようとするのは野暮の骨頂であります。夢精は神經衰弱と稱する大きな病の、一つの症狀に過ぎないのでありますからその本を治さないでその末を治さうとあせるのは良策と言へません。

オナニーの習慣を治すには、たゞ構はずに捨てゝ置くのが一番よいと同じやうに夢精を除くには、矢張りいろ〳〵と悶ないでその儘にして置いて寧ろ止むを得ざる一種の現象だと思つて手を掛けない方が一番要領を得た方法だと思ひます。

以上は神經衰弱者に一番多い惱みの種が、本人の考へて居る程には害のないものであるといふことを說明したのでありますが、すべて慢性病者のいろ〳〵の苦惱の種となつて居る症狀なるものは決して慢性病者が考へる程害はないものであります。もとよりいろ〳〵の症狀があるといふ事は、症狀が無いよりも惡い事に違ひありませんが、どんなに惡い症候であると考へられてゐる事でも、考へやうによつてはたゞ一種の迷妄に過ぎないと言ふことを慢性病者はよく〳〵心得なければなりません。症候と言ふものは、すべて病氣が身體に作用した時、その反應として現れるものでありますから、それを頭から惡いものであると考へるのは間違つてゐるのであります。症狀の程度と言ふものは、それ故必ずしも病氣の程度を示すものではありません。たとへば茲に普通の人と、人を殺した人とが二人、並んで居るとします、その二人の人に向つて、第三者が無頓着に「人殺し」と叫んだとします。そうした場合、人を殺さぬ人は何んとも思ひませぬが、人を殺した方の人は恐らく飛び上るか或は少くとも顏色を變へるに違ひありませんそれと同じやうに、同じ原因が働いても慢性病者の主觀が興奮狀態に置か

れて居りますから、その現れ方は非常に廓大されるのであります。だから與奮狀態にある人が百二十の脈搏を數へたとて、それは普通の人に對して八十乃至九十の脈搏を起すべき原因が働いたと考へてもよいのであります。すべては患者自身の心の如何によつて症狀が左右せられるのでありますから、單にその症狀だけを計つて、その病氣の輕重を判斷することは間違つてゐると言はねば成りません。かの結核患者の熱の如きものは言ふ迄もなく結核の輕重の標準となるのでありますが、熱が高いからと言つて直に病氣が惡化したと判斷するのは、早計であると言はねばなりません。同じ患者が三十七度五分から三十八度に移つた場合、當然病氣が惡化したと考へられますけれど、若しその患者が熱の高くなる前に何か精神に打擊を受けたとか或は特殊の煩悶をしたとかであるならば、その爲にいはゞ熱が廓大されたのであるから必ずしも病氣が惡化したと言はれないのであります。こんな理窟は今更私が述べる迄もなく分り切つてゐることでありますけれど、どうした譯か自分が慢性病に罹ると、自分の主觀を無視してたゞ檢溫器とかその他の物に賴つて病の進退の如何を判斷しようとしますから、吳々も私は注意して置きたいのであります。

だから私は慢性病者が檢溫器を使つたり、或はその他の症狀を計る道具を使用することには贊成しかねるのであります。それ等のものゝ示す結果は少しも病そのものゝ消長を示して居らないからです。

症狀を計量する道具を拋つ許りか、私は寧ろ總て、の症狀を故意に善意に解釋することが慢性病の治癒を容易ならしめるものであると思ふのであります。卽ち高い熱があると自覺したやうな場合、或は心悸の亢進を覺ゑ

たやうな場合、これは自分の精神が興奮して居るから、斯うなつたので實際は輕い熱にすぎないのだ、と思へば遙に樂に處して行くことが出來るのであります。尙又熱の如きものは外物に對する身體の一種の防禦作用であるから熱のあるといふことは自分の身體が、病に立派に抵抗しつゝあるのだと思つたならば少くとも熱の恐怖からは脫することが出來るであらうと思ひます。

このやうに、觀念を轉換して、症狀に對する考へ方を更へたならば、如何なる症狀をも恐れることなく、從つて治癒に赴くことが出來ると思ひます。自分の心で症狀を作つてゐる以上、藥劑とかその他の方法でこれを取り除くことは當を得たものとは言へません。いくら藥を飲んでも、觀念を更へることが出來ない以上、所詮徒勞に歸するより他ありません。

だが、一面から言へば、患者の主觀の程度に依つて、藥を飲むことも一つの方便と見做すことが出來ます。それはどういふ事かと言ひますと、患者の主觀によつて、藥劑が暗示的に效を奏することであります。患者が藥を飲むに當つて、よく利く藥であるといふことを信じて飲めば、必ず効があるのであります。不眠症の場合など催眠藥を飲んだといふことが暗示となつて、よく眠れると言ふことはしば〳〵見られる現象であります。だから患者自身が藥劑の暗示作用を心得て、且それを利用し、症狀の減退を圖るならばよろしいけれど、さもなくて患者が藥劑の効力を疑ひつゝ飲んだならば、何んの役にも立たぬのみか、却つて害をするのであります。自分の不眠が到底藥物では治らぬといふやうな觀念を得たが最後患者は決して何を飲んでも充分な眠りを得ることは出來ません。ところが、多くの患者は長

い經過の間に必ず藥劑に對して疑を抱き、その効力を信用しなくなつて來ます。そうなつた上は藥劑の暗示作用を何ごかして信じようごと思つても最早信ずるこごは出來ません。結局は症狀を誇張して恐れ藥劑に疑ひを抱き、百策盡きて絶望に陷るより他はないのであります。

これごと言ふのもみんな患者の心がさうせしめたのでありますから、慢性病者たるものは、よく〳〵この邊のこごを考へて自分の主觀を樹て直し、そうして病を驅逐するに心掛けねばなりません。

慢性病者が他人に症狀を訴へる有樣を見ますごと、いつも自分が他人よりも餘計に苦しんでゐるやうに告げます、時ごしては他人は決して自分程苦しんでゐない、同じ病氣でも自分が一番苦しんでゐるのだごと考へて居ります。これも畢竟患者の心が病狀を誇張するためでありまして、これが驕て慢性病の治り難い理由ごなるのであります。よく自分の病氣だけは特別だから、特別な考慮を下して、その手當を敎へてくれごと言ふやうな相談を受けるこごがありますが、さやうな人はみんなその主觀が著しくかたよつて居るのであります。中には自分はかう言ふ病氣を持つてゐる、あゝ言ふ病氣も持つて居る、これでは單純な病氣より治りにくいごと思ふが、どうしたらよいであらうか、ごと相談をかけてくる人もあります。前にも申しましたやうに、慢性病者は大抵は自分で病をこしらへてゐるのですから、どんなに澤山病氣があつても一度その觀念に變化が起つたならば、それごと同時にあらゆる症候が退いて行くのであります。

また慢性病者は非常に慾が深くなります。慾が深いごいふこごは金錢のこごを言ふのではありません。病氣を慾深く自分に背負ふこごを好む

と同時に、いろ〳〵な藥劑やいろ〳〵な治療法を慾深く實行しやうと思ひます。滋養强壯劑といつたものを片つ端から試み、藥といふ藥を悉く服用するといつたやうな現象はしば〳〵見られるところでありますが、これなども畢竟患者の觀念が片寄つてゐるからであります。すべての症狀はその本源が一つであるといふことを忘れて唯その苦痛の元となる症候のみを對象とするために、慾深く治療法を實行しなければならぬのであります。私は後に慢性病の治療を說くところに、節慾といふことを述べるつもりでありますが、節慾といふことは、單に食慾を節したり、性慾を節したりすることに限らず、かうした藥劑とか治療法とかに對する不當な慾望をも節しなければならぬのであります。人間は恐ろしいものに出逢つた場合、もしそれに對して勇敢に鬪ふ心が無ないならば、あらゆる方法を慾深く行つて防禦を講ずるのが常でありますが、而もそれに依つて、恐怖心を取り除くことは出來ず、所謂壘の上に壘を築くといふ有樣を生ずるのであります。慢性病者の多くは畢竟病氣の恐怖を逃れようとして、あらゆる防禦法を講ずるのでありますが、どんなによい方法を講じても滿足といふ程度に至らないのが常であります。唯主觀をかへて積極的に病氣に面接したならば、立ちどころに問題は解決されるに拘はらず、それを行ひ得ないのが慢性病者の常であります。

茲で私は慢性病の豫防といふことに就き少しく說いて置かねばなりません。慢性病者の多くは治療に關する書物をむさぼり讀んでゐる爲に、色々の症狀の起ることが怖くなつて、それらの症狀を未然に防がうと努力致します。例へば結核に罹つて未だ喀血をしない人は、喀血に對する豫防法

を講じようとします。況んや、一たん喀血をした人の如きは、二度目に喀血しない爲に、何とかしてそれを防ぐ方法はないかとあせります。殊に喀血が、一定の季節と關係があるやうに、治療書に書かれてありますと、その季節になりますと、一種の暗い氣持ちになつて、今にも喀血が起りはしまいかとおづ〳〵して暮します。また神經衰弱の患者が長い間不眠にでも惱まされると、胃酸過多を起しはすまいか、胃痙攣を起しはすまいかと、それを豫防しようとします。

ところがかやうな考へこそ、その實豫防どころか、却つて一種の暗示となつてそれ等の症狀を惹き起すものであります。喀血の豫防を心配して居る時、喀血が起ることは結核患者にしば〳〵見られるところであります。夢精を起しはしまいかと心配してゐる神經衰弱者が夢精を起すことは有り勝ちのことであります。即ち豫防の心掛けは反對に症狀誘發の役に立つに過ぎません。だから私は慢性病者は病の豫防といふやうなことに心を痛めてはならぬと忠告したいのであります。肺結核患者が腸結核になることを恐れて、なるべく痰をのみ込まぬやうにし、戰々兢々として暮しその内に神經性下痢を起して腸結核と思ひ込み、長い間その爲に苦しんで衰弱の餘り、遂には、本當の腸結核を惹き起すといふやうな事は決してまれではありません。だから慢性病患者は、唯當面の苦痛に對してそれを切り拔ける策を講ずればよいのであります。少し胸が痛むと云つて、直ぐ肋膜炎でないかと思つたり、少し腹が痛いと感じて直ぐ腹膜炎ではないかと考へて、その豫防を講ずるといふことはまことに愚かなことゝ言はなければなりません。

第四章　各種の慢性病

一、神經衰弱

本書に於て私は主として慢性病に共通した特質を指摘し、それに對する治療法を述べようとするのでありまして、一々の慢性病の病狀を述べたり、その病狀の一つ一つの療法を述べるのではありません。實際又慢性病なるものは一つ一つの病狀を目あてに治療の道を講じてゐては、決して治るものではありませんから、むしろ慢性病治療の大本について述べるのが至當でありますが、特に注意を要する二三の項目について說明して置かうと思ひます。さうして俗に神經衰弱と稱せられるものは、すべての慢性病患者に多少の程度に存在するものでありますから、これを眞先に述べて置かうと思ふのであります。

凡そ世の中に摑みどころのないものは澤山ありますけれども、神經衰弱ほど摑みどころのないものはありません。神經衰弱といふ名は今から數十年前、はじめてアメリカの醫者が付けたものでありまして、一寸考へますと神經が衰弱した現象を言ふやうに思はれますが、その實神經衰弱の患者は神經が衰弱してゐないのみか却つて神經が昂ぶつて居るやうな場合が少くありません。ですから、寧ろ神經異常と言つた方が、適當なのであります。だから神經衰弱といふ言葉の外に、その特種のものに對して神經質といふ言葉を使つて居る學者もありますが、それは、まことによい考へ方であると思ひます。實際神經衰弱などと、一つの限られた名稱を使ふことは寧ろ不適當であると思はれる程、この病氣は種々雜多な症候を呈するのであ